

西部開発事業(畠地帯総合土地改良事業)

——緊急発掘調査報告——

南村・東田 遺跡

1979

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

西部開発事業(畑地帯総合土地改良事業)

—緊急発掘調査報告—

南村・東田遺跡

1979

伊那市教育委員会
南信土地改良事務所

序

長野県伊那市西春近は埋蔵文化財の数多い地として古くより知られていました。この数多い貴重な文化財が、ここ数年来の急激な開発の波によって、壊滅の状態におびやかされています。遺跡本来の意味からすれば現状保存が最高策であると考えられています。しかし、世間の要請からしてみれば前の保存方法では各種の不都合な問題が生じますので、現状では記録保存という措置をとつてまいりました。

この度、南信土地改良事務所が主体となって行った伊那西部土地改良事業（西春近柳沢地区）内に周知の遺跡（南村遺跡）、（東田遺跡）が該当するとのことで、工事の着工以前に伊那市教育委員会が発掘調査を行った。

調査は昭和53年10月から11月にかけて行なわれ、多大な成果を収ることが出来ました。南村遺跡の成果は縄文早期末から縄文前期初頭にかけての竪穴住居址6軒、平安時代の竪穴住居址3軒、東田遺跡では縄文中期の竪穴住居址2軒、平安時代の竪穴住居址1軒、中世の竪穴住居址1軒、竪穴24基、柱穴群1基であります。

最後に、調査報告書の発刊にあたって、南信土地改良事務所職員一同、調査団の諸先生、発掘作業員の皆様に衷心より謝意を捧げます。

昭和54年3月8日

伊那市教育委員会

教育長 伊 沢 一 雄

まえがき（南村・東田遺跡の環境）

位 置

南村遺跡は、長野県伊那市西春近柳沢部落、東田遺跡は西春近柳沢部落に所在しています。伊那市街より遺跡地までの道順は次の通りである。飯田線沢渡駅で降り、南へ歩いて30分程行くと、柳沢部落がある。前者の遺跡は同部落の南はずれ、藤沢川に面し、後者は同部落の東側に面する。

遺跡の名称

1 城平上	40 唐木原
2 城 平	41 唐木古墳
3 常輪寺跡	42 北丘B
4 宮 林	43 北丘A
5 山の根	44 北丘C
6 山 本	45 南丘B
7 常輪寺下	46 南丘A
8 上 村	47 南丘C
9 北 条	48 眼子田原
10 上島下	49 山の神
11 上 島	50 上の塚
12 東方B	51 沢渡南原
13 東方A	52 下小出原
14 村岡北	53 天伯原
15 村岡南	54 南 村
16 大 境	55 東 田
17 中 原	56 天 伯
18 百駄刈	57 下小出原
19 西垣外	58 井の久保
20 細ヶ谷A	59 表木原
21 細ヶ谷B	60 山の下
22 小出城	61 菖蒲沢
23 吉ノ原	62 富士山下
24 浜射場	63 富士塚
25 中 村	64 広垣外1
26 中村東	65 広垣外2
27 山寺垣外	66 鳥井田
28 白沢原	67 高速道
29 名 遊	68 西春近南
30 名遊西古墳	小学校附近
31 名遊東古墳	69 安岡城
32 名遊南	70 城の腰
33 児 塚	71 横 吹
34 銀葉原西古墳	72 和 手
35 銀古原東古墳	73 上手南
36 カンバ垣外	74 宮入口
37 九 山	75 寺 村
38 南小出南原	76 下 牧
39 葉師堂	77 下牧経冢



位置及び遺跡分布図

地形・地質

今までに西春近地区についての地形・地質について述べられているのを参考にして述べてみることにする。『伊那谷に一般的に通ずる地形は西に、中央アルプス、東に南アルプス、その前山である伊那山脈とにはさまれた南北に細長い盆地状地形を呈している。中央の最低部に源を諏訪湖に持つ天竜川が流れ、一般的によばれている縱谷状地形を成している。さらに本流である天竜川の両岸には数多くの小河川があり、それらによって形造された大小の扇状地、河岸段丘、渓谷が展開している。伊那市附近では小沢川、三峰川、小黒川が主たる河川であり、これらは同様に大きな段丘や扇状地を形成した要因となっている』(眼子田原遺跡発掘報告書による)

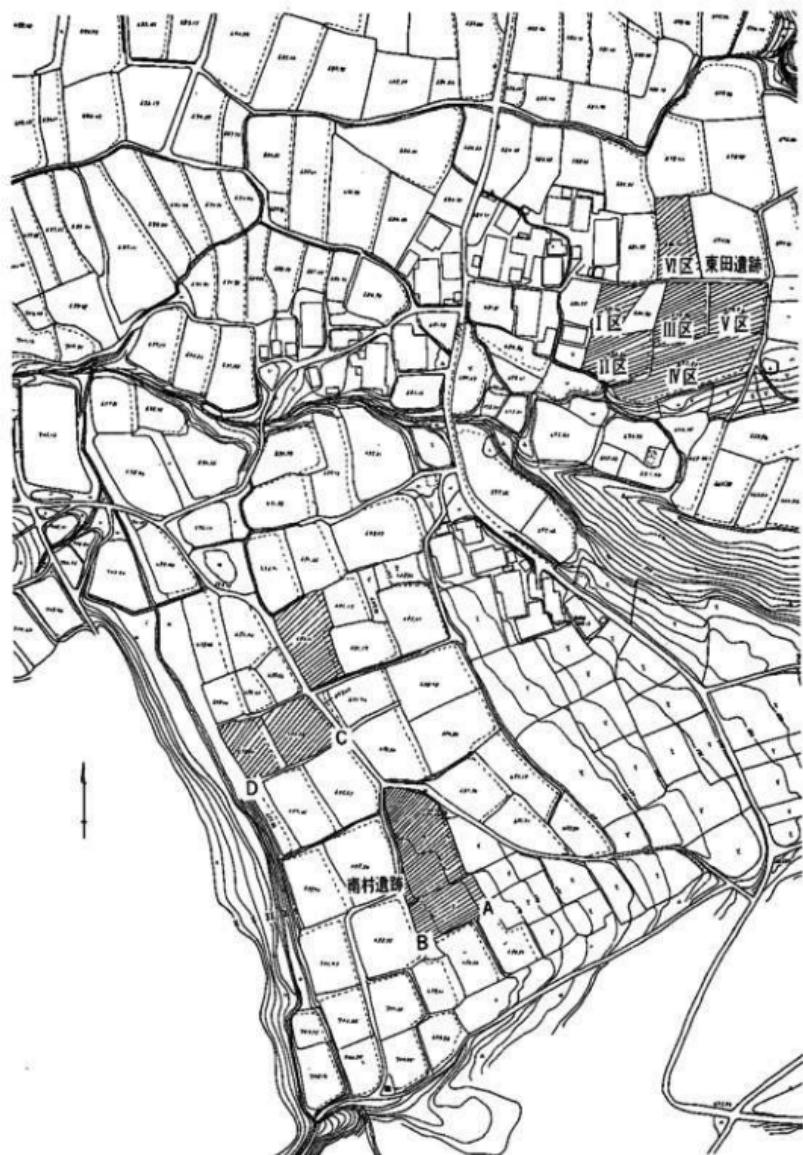
南村遺跡は藤沢川の左岸段丘と山麓の扇状地の双方の重なった面に存在し、標高は690m～700m前後に位置している。東田遺跡は南は大洞川、北側は前沢川とにはさまれた段丘突端部にあり、標高は675m～680m前後を測定できる。現在、前者の遺跡は、水田や桑畠に利用され、また、後者は水田に利用され、柳沢部落の穀倉の一部を成している。

周辺遺跡との関連

南村遺跡は出土遺物より縄文早期末葉から縄文前期初頭、奈良・平安時代の遺跡であることが明らかになってきたが、調査区域が限定されていたので、結論づけられるような成果を獲るにはいたらなかった。東田遺跡は縄文中期、平安時代・中世の遺跡であることが明らかになった。そこで、両遺跡を取りまく周囲の遺跡を(前頁の地図)をもとに述べてみたいと思う。

下小原遺跡は縄文中期、土師器、須恵器、灰釉陶器。天伯遺跡は縄文中期、縄文後期、井の久保遺跡は縄文中期、縄文後期、表木原遺跡は縄文中期、土師器、須恵器、灰釉陶器。山の下遺跡は縄文中期、菖蒲沢遺跡は旧石器、縄文早期、縄文中期、縄文後期、縄文晚期、土師器、須恵器、灰釉陶器。富士山下遺跡は縄文中期、弥生後期、土師器、須恵器。富士塚は土師器、須恵器、横穴式石室。広垣外Ⅰ遺跡は縄文中期、土師器、須恵器。広垣外Ⅱ遺跡は土師器、須恵器、灰釉陶器。鳥井田遺跡は縄文中期、土師器、須恵器、灰釉陶器。高速道遺跡は縄文中期、土師器、須恵器、灰釉陶器。西春近南小学校附近遺跡は土師器。安岡城遺跡は、縄文中期、弥生後期、土師器、須恵器、灰釉陶器。中世、城の腰遺跡は縄文中期、弥生後期、土師器、須恵器。横吹遺跡は縄文中期、土師器、須恵器、灰釉陶器。和手遺跡は縄文中期、弥生後期、土師器、須恵器、灰釉陶器。土師器、上手南遺跡は弥生後期、須恵器。宮入口遺跡は縄文中期、土師器、須恵器。寺村遺跡は縄文中期、土師器、須恵器。下牧遺跡は縄文早期、縄文中期、下牧経塚は経塚遺跡である。以上、述べてきた遺跡の内訳は現在までに確認されているだけで、今後、内容的にも、また數的にも変化が生じてくるものと思われる。

(飯塚 政美)



地形図 (1 : 3000)

凡 例

1. 今回の発掘調査は西部開発事業に伴なう、土地改良事業で、第6次緊急発掘調査にもとづく報告書とする。
2. この調査は、県営畠地帯総合土地改良事業に伴なう緊急発掘で、国、県、市の補助金のもとに、事業は長野県南信土地改良事務所の委託により、伊那市教育委員会が実施した。
3. 本調査は、昭和53年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし文章記述もできるだけ簡略にし、資料の再検討は、後日の機会にゆずることにした。
4. 本文執筆者は、次のとおりである。担当した項目の末尾に氏名を記した。

友野良一、飯塚政美

◎図版作製者

○遺構及び地形

友野良一、飯塚政美

◎写真撮影

○発掘及び遺構・遺物

友野良一、飯塚政美

5. 本報告書の編集は主として、伊那市教育委員会があたった。

南 村 遺 跡

目 次

序

凡 例

目 次 (1)

挿図目次 (2)

表 目 次 (2)

図版目次 (2)

第Ⅰ章 発掘調査の経過 (3 ~ 5)

　　第1節 発掘調査の経緯 (3)

　　第2節 調査の組織 (3)

　　第3節 発掘日誌 (4 ~ 5)

第Ⅱ章 遺 構 (6 ~ 15)

　　第1節 住居址 (6 ~ 15)

第Ⅲ章 遺 物 (16 ~ 19)

　　第1節 土 器 (16 ~ 19)

　　第2節 石 器 (19)

第Ⅳ章 ま と め (20)

挿 図 目 次

第1図	遺構配置図	(6)
第2図	遺構配置図	(7)
第3図	第1～6号住居址実測図	(9 ~10)
第4図	第7号住居址実測図	(12)
第5図	第7号住居址カマド実測図	(15)
第6図	第8号住居址(左上)・第8号住居址カマド(右上)・第9号住居址(左下)・第9号住居址カマド(右下)実測図	(13~14)

表 目 次

第1表	出土土器の形状一覧表	(16)
第2表	出土土器の形状一覧表	(16)
第3表	出土土器の形状一覧表	(17)
第4表	出土土器の形状一覧表	(17)
第5表	出土土器の形状一覧表	(17)
第6表	出土土器の形状一覧表	(18)
第7表	出土土器の形状一覧表	(18)
第8表	出土土器の形状一覧表	(18)
第9表	出土土器の形状一覧表	(19)
第10表	出土石器の形状一覧表	(19)

図 版 目 次

図版1	遺跡全景	図版9	出土土器
図版2	遺構	図版10	出土土器
図版3	遺構	図版11	出土土器
図版4	遺構	図版12	出土土器
図版5	遺構	図版13	出土土器
図版6	遺構	図版14	出土土器
図版7	遺物出土状況	図版15	出土土器
図版8	出土土器	図版16	出土土器
		図版17	出土石器

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西春近地区的西部開発事業（県営畠地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島、東方部落、昭和49年度の東方、村岡、城、山本部落にわたって行なわれてきました。昭和51年度は沢渡の上段、（眼子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出、宮の原、中村部落にかけて行なわれました。本年度は柳沢地区と白沢、南小出地区が該当し、特に柳沢地区的南村遺跡は桑畑が多いために蚕養の状況を見て、発掘調査にかかるという当初からの計画通り10月上旬から着手いたしました。

発掘着工以前に南信土地改良事業所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では、その件について承諾しましたので、市教育委員会を中心に、南村遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を行うことにしました。

南信土地改良事務所長と市長との間で「埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書」を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

南村遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢總一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽 映士	伊那市教育委員長
々	向山 辻雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	石倉 優彦	伊那市教育委員会社会教育課長
々	有賀 武	〃 課長補佐
々	米山 博章	〃 係長
々	三沢真知子	〃 主事

発掘調査團

團長	友野 良一	日本考古学协会会员
副團長	根津 清志	長野県考古学会会員
々	御子柴泰正	〃
調査員	飯塙 政美	〃
々	田畠 長雄	〃
々	福沢 幸一	〃
調査補助員	原 修一	〃

第3節 発掘日誌

昭和53年10月9日 テントを3幕張る。2幕を下の水田に、南北に細長く張る。この2幕は作業員達の休息の場とし、そのために、中央部にスノコを6個、規則正しく配列しておく。上の畑に道具置場用のテントを一幕張る。南側の向きに入口を設ける。本日は国民体育大会の炬火リレーが西春近を巡回した。

昭和53年10月11日 本日より本格的な発掘調査となった。作業員達は20名を越え、ひさしぶりの再会を喜びあっていた。大部分は顔なじみであったが、なかには新入りもいた。遺跡地の中心地を把握したいので、桑畠にグリットをいれてみると、現在は桑畠ではあるが、過去に水田につくられた地場層が発見された。遺物はところどころで数点発見された。遺物の出土は割合に集中した個所が1カ所みられ、何か落ち込んでいるような状態であった。

昭和53年10月12日 昨日、同様に、分布調査を広げていくが、遺物の出土は散布的であり、遺構らしきものの確認はつかめなかった。本日頃で遺跡地周辺の稲刈りも、ほぼ終了した模様であった寒さも、日、一日と増し、肌身にきつく感じとれるようになってきた。

昭和53年10月13日 昨日、同様に、一段下った桑畠の分布調査を実施してみる。遺物は散布していたが、遺構の検出はみられず、出土した遺物のなかに、いわゆるおせんべい式土器の一派が割合が多く含まれていた。

昭和53年10月14日 10月11日に検出された落ち込み附近を拡張してみると、隅丸方形に近いプランがはっきりしてきた。その落ち込みのプランが割合に大きいので、住居址の切り合い関係を充分に検討してみる必要があると思われた。

昭和53年10月18日

昨日に、引き続いて、
住居址のプラン確認に
全力を注ぎ込む。プラン
確認は午後一杯かか
って終了する。

昭和53年10月19日

昨日、一応の全体的な
プラン確認ができたの
で、住居址の掘り下げ
を開始する。掘り下げ
していくに従って、切り
合い関係がはっきりし
てきた。遺物はおせん
べい式と呼ばれる土器
が大部分であった。そ



発掘風景

れで、住居址の番号を決めるのには、もう少し検討が必要と考えられたので、遺物は出土地点にそのまま置いて、該当する住居址が決定された時点を取り上げることにした。

昭和53年10月20日 住居址のほぼ全体的なプランが明確となり、南より第1号住居址、第2号住居址、一段下って第3号住居址、第4号住居址、第5号住居址、第6号住居址となった。本日、一日中かかって、その全体的な掘り下げを完了する。住居址の新旧関係は第1号住居址が最も古く、次に第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址、第5号住居址、第6号住居址となっており、したがって第6号住居址が最も新しい。

昭和53年10月21日 新らに、遺物の出土しそうな個所に、分布調査的にグリットを入れてみるが、わずかに土器片の出土をみたが遺構の検出は何も認められなかった。

昭和53年10月23日 遺物の出土しそうな個所のグリット掘りを実施する。

昭和53年10月24日 昨日に引き続いて、分布調査を実施すると、北側の水田地帯の地場層直下に黒土の落ち込みがみられ、第7号住居址とする。プランを確認するや、ただちに掘り下げを開始する。

昭和53年10月25日 昨日、発見された第7号住居址の掘り下げを一日中かかって、ほぼ完掘するそれによると、カマドを東壁の中央部にもつた平安時代の住居址であることが判明した。一方、グリット掘りを西へ西へと進めていくと、2カ所黒土の落ち込みがみられ、これを第8号住居址、さらに第9号住居址とする。作業員をうまく分配して、夕方までにはあとの2つの住居址のプランを確認できた。

昭和53年10月26日 第8号住居址、第9号住居址の掘り下げをする。第8号住居址は東壁の中央部にカマドを、第9号住居址も同様に東壁の中央部にカマドをもっていた。双方ともカマドの組成は石組粘土カマドであった。遺物の出土状態は割合に少なかった。西壁から北壁にピット列がみられ、おそらく、これは北風をよけるための防風壁のピットであろう。

昭和53年10月27日 第1号住居址から第6号住居址の清掃、第8～9号住居址の完掘、及び第7～9号住居址の清掃。

昭和53年10月28日 第1号～9号住居址の写真撮影のための清掃を午前中一杯で終了、午後、同様の住居址及び第7～9号住居址のカマドの写真撮影、遺物出土状況の写真撮影。

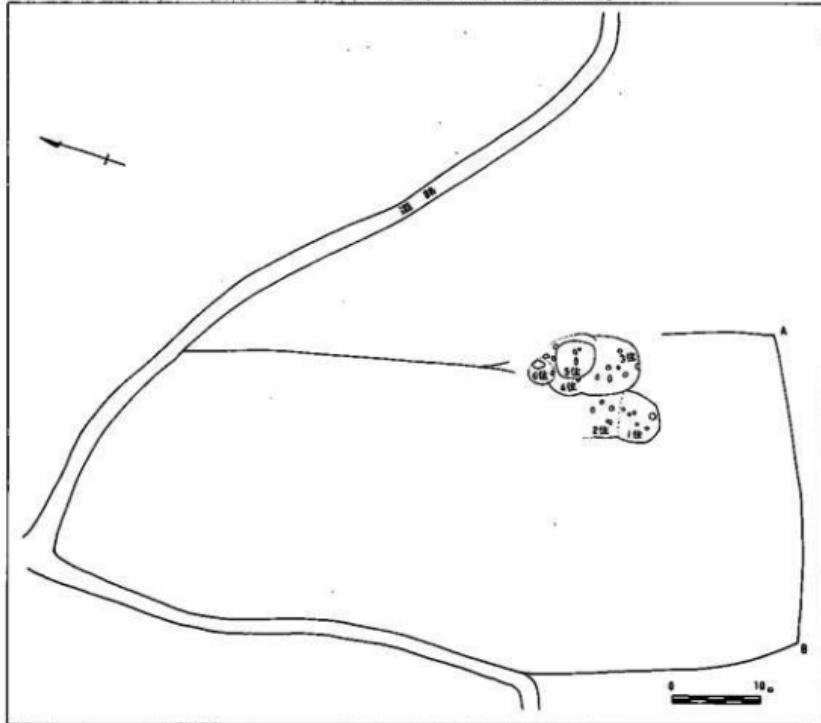
昭和53年10月30日 第1号住居址から第6号住居址の平面及び断面実測。

昭和53年10月31日 第7号～9号住居址の平面及び断面実測、カマドのカッティング、全測図の作製。
(飯塚 政美)

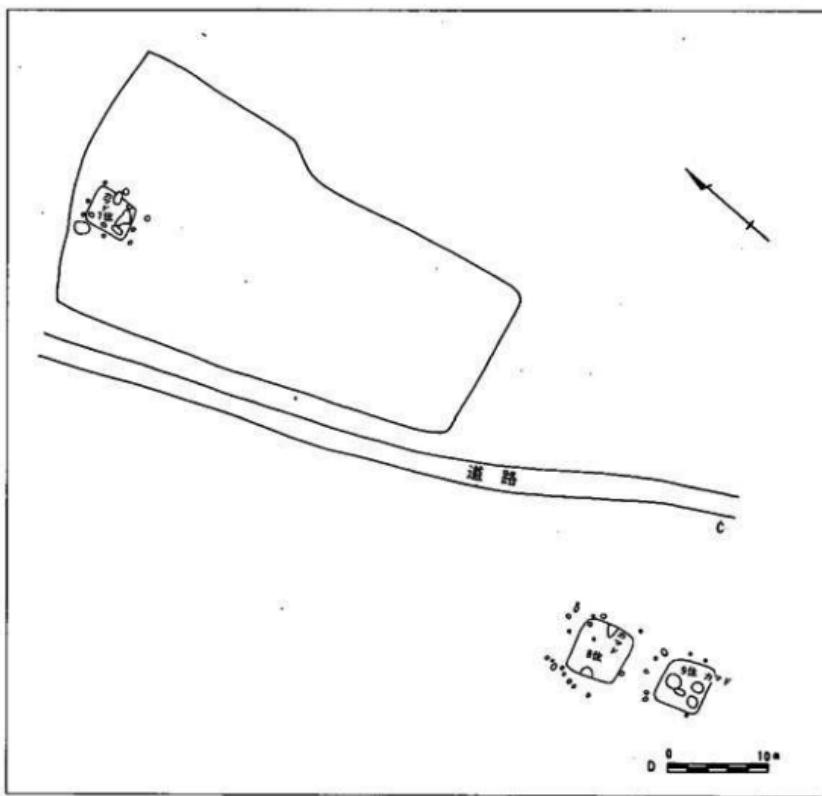
第Ⅱ章 遺構

今度、発掘調査された遺構は縄文時代の住居址6軒、奈良時代の住居址1軒、平安時代の住居址2軒であった。第1図、第2図の遺構配置図の説明は、まえがきの地形図と照合してみてください。照合は両図にA・B、またはC・Dの符号を入れてありますので、この符号を合致して比較してみてください。

各々の住居址の内容については、第1節の住居址で、触れてみるが、今回は大般の概要について述べてみるとことにしてよう。第1号住居址は第2号住居址に切られ、第2号住居址は第3号住居址と第4号住居址に切られ、第3号住居址は第4号住居址と第5号住居址に切られ、第5号住居址は第3号住居址と第4号住居址を切っている。第6号住居址は第4号住居址を切っている。第7号住居址、第8号住居址、第9号住居址はそれぞれ単独なかたちで発見された。



第1図 遺構配置図



第2図 遺構配置図

第1節 住居址

第1号住居址 (第3図、図版2)

住居址群中の南西端に発見され、平面プランは（北側は第2号住居址に切られているので不明ではあるが）大般推定するに隅丸方形状に近い形を成し、ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。規模は東西4m95cm、南北は切り合いのため不明、壁は外傾し、壁高は浅くて10cm位にも満たない全般的に軟弱で、凹凸がはげしかった。

床面はローム層面上に構築され、軟弱であり、凹凸がはげしかった。ピットは大小さまざま10数カ所にわたって検出されたが主柱穴となり得る条件をそなえたのはP₂・P₇・P₁₃・P₁₁・P₁₅である。この条件とは深さの点であろう。P₁₅のように柱穴のなかに石が入っていたのもみうけられた。また、床面上に各所にわたって炭化物が点在していた。これらは本址が火災にあった際に出きたものであろ

う。炉らしき跡はどこにも見当らなかった。覆土は黒色土が充満し、同土のなかに多量の炭化物の検出をみた。

遺物はおせんべい式土器の一群の出土をみた。したがって本址は縄文早期末葉から前期初頭の住居址と思われる。

第2号住居址（第3図、図版2）

第1号住居址の北側に発見され、表土面より30cm位下ったローム層面を掘り込んで構築された竪穴住居址である。本址は南側で第1号住居址を切り、東側で第3号住居址、第4号住居址に切られている。平面プランは方形と思われる。規模は推定では南北5m50cm、東西5m50cm程を測定できる。壁高は西側は30cm位で、壁は大體垂直に近く、軟弱で、凹凸がはげしかった。床面は軟弱で凹凸が顕著であった。炉らしき跡はどこにも発見されなかった。

ピットは10箇所存在したが、主柱穴となると思われるのは、P5・P10・P16・P17等々深いものが該当するのであろう。覆土は黒色土が主となり、そのなかに多量の炭化物の検出をみた。

遺物はおせんべい式土器の一群の出土をみた。したがって、本址は縄文早期末葉から前期初頭の住居址と思われる。

第3号住居址（第3図、図版3）

本址は西側で第1号住居址、第2号住居址を切り、北側で第4号住居址に切られている。規模は切り合い関係が複雑な為にその正確な数値は把握できないが、推定するに南北6m30cm、東西5m95cm位を測定でき、平面プランは隅丸方形で、ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。壁高は南は20cm位、東は10cm位で、その状態はわずかに凹凸が認められ、軟弱となっていた。

床面は大體水平で、軟弱となっていた。ピットは10箇所、各種さまざまであったが、主柱穴となり得るのはP4・P15・P16であろう。覆土は黒色土層が主となり、そのなかに多量の炭化物が含まれているのが認められた。炉らしき跡は確認できなかった。

遺物はおせんべい式土器の一群の出土をみた。したがって、本址は縄文早期末葉から前期初頭の住居址と思われる。

第4号住居址（第3図、図版3）

本址は西側で第2号住居址を切り、南側で第3号住居址を切り、中央部で第5号住居址に切られている位置に発見され、表土面より50cm位下ったローム層面を掘り込んで構築されていた。推定するに南北6m50cm、東西6m20cm程の規模を有し、円形状プランの竪穴住居址である。壁高は残存している部分で西側が35cm、東側は10cm程度であった。状態は内窓気味で、軟弱であった。床面は凹凸がはげしく、軟弱であった。柱穴は切り合い関係が複雑な為に、その実体は把握できなかった。覆土は黒色土で、多量の炭化物を含む。炉らしき個所はどこにもみあたらなかった。

遺物は、おせんべい式土器の一群の出土をみた。したがって、本址は縄文早期末葉から前期初頭の住居址と思われる。



第3図 第1～6号住居址実測図



第5号住居址（第3図、図版3）

本址は第4号住居址の床面土を掘り込んだ状態で発見され、表土面より50cm位下ったローム層面を掘り込んで構築している。円形プランを成し、南北4m50cm、東西3m60cm程の竪穴住居址である。住居址群中、本址は完全な姿で発見された唯一のものであった。壁は西、東、南は内弯気味、北は外傾、四壁はともに軟弱で、凹凸が顕著であった。壁高は西38cm、東23cm、南28cm、北15cm程を測る。

床面は凹凸がはげしく、中央部は若干高くなつておらず、軟弱であった。ピットは20数カ所検出されたが主柱穴となり得るのはP₈・P₁₁・P₁₂等であった。覆土は黒色土で、多量の炭化物の含みをみたが、燃らしき跡はどこにも発見されなかつた。

遺物はおせんべい式土器の一群が出土し、したがつて、本址は縄文早期末葉から前期初頭の住居址と思われる。

第6号住居址（第3図、図版4）

本址は6軒の住居址群中、最も北側に位置し、表土面から50cm程下ったローム層面を掘り込んで構築されている。本址の南側は第5号住居址に切られている。規模は推定するに南北3m20cm、東西3m90cm程である。平面プランは西側に残るわずかな壁より推測して円形状を呈していると思われる。形は竪穴住居址に含まれる。壁高は北、東、南は無いが、残存している西壁は30cm前後を測る。状態は内弯気味で、軟弱であった。

床面はローム層面につくられ、軟弱で、凹凸は顕著であった。ピットは20数カ所発見されたが、主柱穴となり得るのは、そのうちの深いものと思われる。覆土は黒色土で、多量の炭化物を含んでいた。

遺物はおせんべい式土器の一群が出土し、したがつて、本址は縄文早期末葉から前期初頭の住居址と思われる。

第7号住居址（第4～5図、図版4）

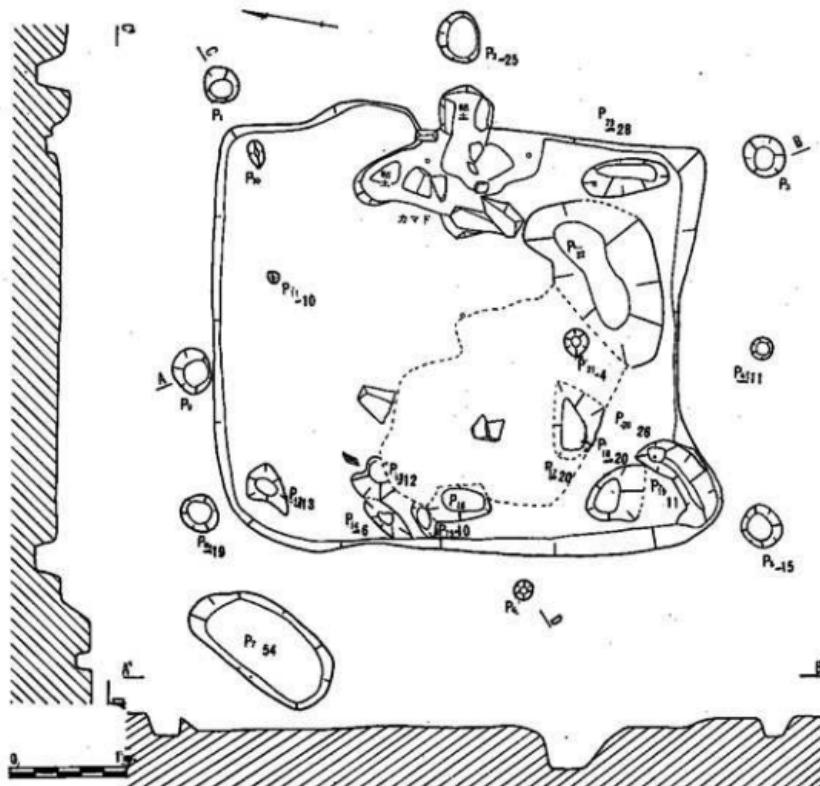
本住居址は発掘調査地区内の最も北側に存在している。平面プランは隅丸方形を呈する竪穴住居址であり、その規模は南北4m、東西3m83cmを測る。第III層にあたる黒色土がローム層に落ち込んで覆土となっている。壁高は10cmから30cm位を計える。その状態は北壁は割合に急公配で、外傾し、南、東、西壁はなだらかな傾斜で外傾している。全面的に軟弱気味で、壁面では西は多くの凹凸が、南壁ではわずかな凹凸が認められた。

床面は軟弱で、凹凸は顕著であった。柱穴は壁の周間にわたって分布しており、それはP₁～P₉までであろう。カマドは東壁中央部にあり、石組粘土カマドで、その保存状態は極めて良好であった。

遺物はカマドの周辺に集中的に出土した。内容的については、土師器、須恵器、灰釉陶器であつて、本址は平安時代の住居址と思われる。（飯塚 政美）

第8号住居址（第6図、図版5）

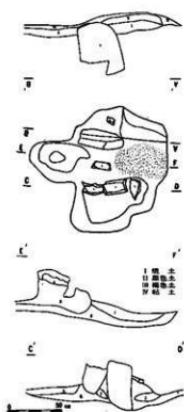
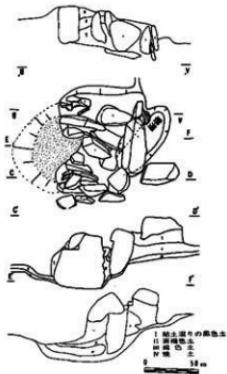
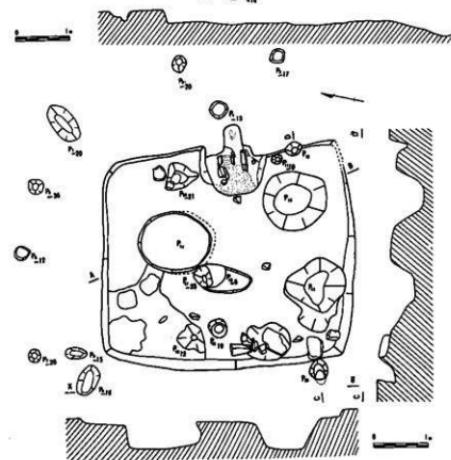
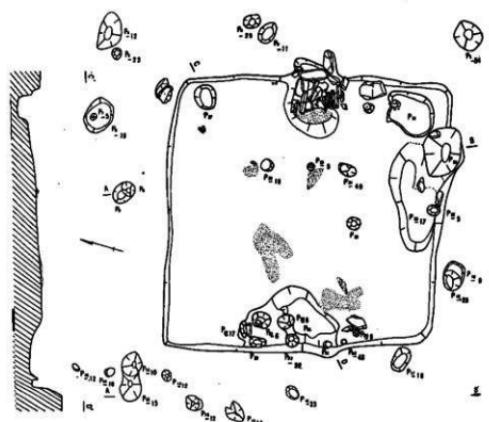
本址は遺跡地の西側の中央高速道路の直下に存在し、西は表土面より60cm、東は表土面より90cm位下ったローム層面を掘り込んだ竪穴住居址である。隅丸方形の平面プランを呈し、その規模は南



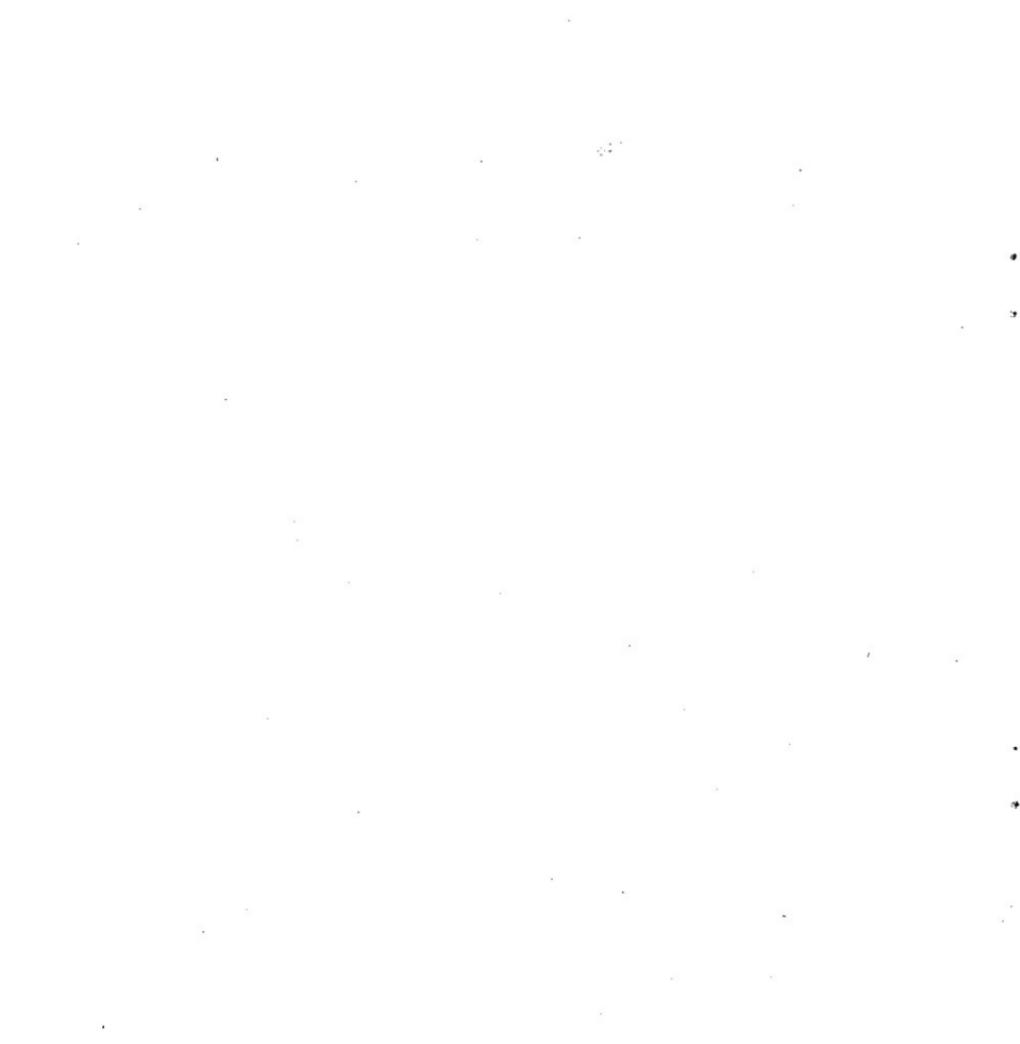
第4図 第7号住居址実測図

北5m5cm、東西5m7cmを測る。覆土は黒色土が落ち込んでいた。壁高は基盤が西から東の傾斜のために、西は高くて60cm、東は30cm位であった。壁面は全般的に外傾し、特に西壁には各所にわたりて凹凸が顕著であった。

床面はローム層のかたいタタキになっており、凹凸が各所にみられた。また、同面上に多量の焼土の堆積がいたるところにみられ、火災の跡をしのばせてくれる。柱穴は床面上のもの、また壁近くの深いのが主柱穴になると思われ、北西のピットの一群は防風用のへいの跡と思われる。カマドは東壁の中央に位置する石芯粘土カマドであり、その規模は南北1 m 20 cm、東西1 m 55 cmを測り天井部及び両袖部も良好に残っていた。たき口附近は焼土の堆積も厚く、赤々としていた、支脚石



第8図 第8号住居址(左上)・第8号住居址カマド(右上)・第9号住居址(左下)・第9号住居址カマド(右下)実測図



もしっかりし、直立不動の姿であり、壁面のすぐ近くに煙道も確認できた。

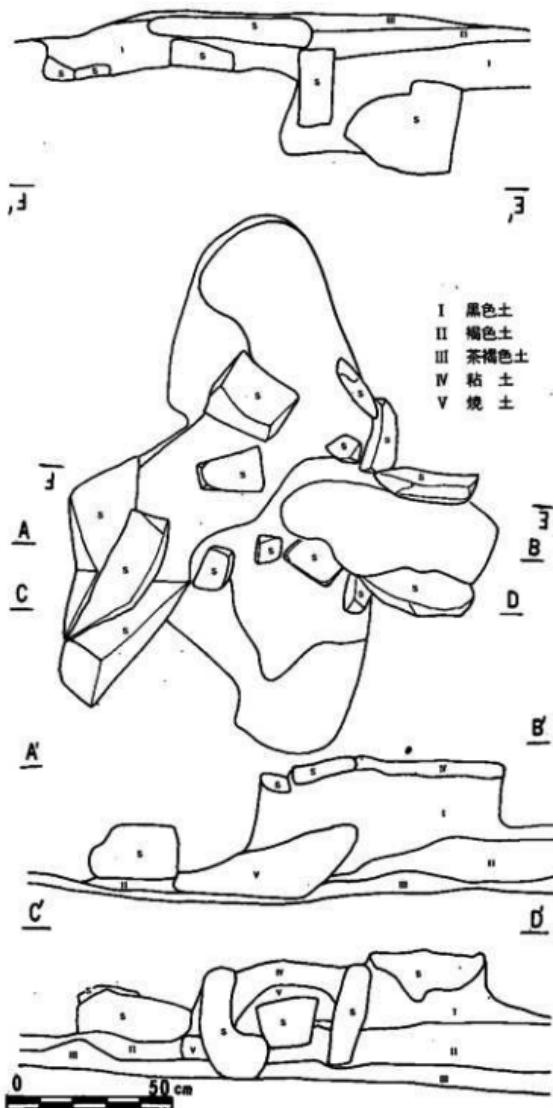
遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器であり、したがって、本址は平安時代の住居址と思われる。

第9号住居址(第6図)

本址は第8号住居址のすぐ南側に検出されローム層を掘り込み構築された竪穴住居址である。平面プランは隅丸九方形である。壁高は10cm~20cm位の範囲に含まれ、外傾し、凹凸が顕著であった。床面はローム層でつくられかたくくなっていたが凹凸が顕著であった。

ピットは北から東の壁外の存在するものは防風用のへいの跡と思われる。P13・P14・P15は形態からして貯蔵穴の要素が強い。P20のように内側へ向けて傾斜をしているのもみられた。カマドは東壁中央部にあり石芯粘土カマドであった。遺物は、土師器、須恵器が出土した奈良時代と思われる。

(友野 良一)



第5図 第7号住居址カマド実測図

第III章 遺物

第1節 土器

土器の説明はスペースの関係上表を作製して、一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容説明を附記しておくことにする。その項目は、図版、番号、胎土、保存状態、色調、文様の特徴、備考等である。

胎土、保存状態、色調についての記述は、明らかな基準によったものではなく、筆者の主觀によるものである。
(飯塚 政美)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文 様 の 特 徴	備 考
8	1	少量の長石	良 好	黒褐色	5	細線	第1号住居址
タ	2	タ	タ	タ	4	無文	タ
タ	3	タ	タ	タ	5	細線	タ
タ	4	多量の長石	タ	茶褐色	6	無文	タ
タ	5	タ	タ	タ	4	隆帯	細線 刻目
タ	6	多量の繊維	普 通	黒褐色	9	縦文	タ
タ	7	少量の長石	良 好	タ	4	無文	タ
タ	8	少量の雲母	タ	赤褐色	5	沈線	タ
タ	9	多量の長石	普 通	茶褐色	5	隆帯	タ
タ	10	少量の長石	良 好	黒褐色	4	無文	タ
タ	11	多量の長石	普 通	タ	5	隆帯	沈線
タ	12	多量の雲母	良 好	タ	4	無文	タ
タ	13	タ	タ	明白褐色	3	細線	タ
タ	14	多量の長石	タ	黒褐色	4	タ	タ

第1表 出出土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文 様 の 特 徴	備 考
9	1	多量の長石	良 好	黒褐色	5	隆帯 沈線	第2号住居址
タ	2	多量の雲母	普 通	明白灰色	4	無文	タ
タ	3	少量の長石	タ	タ	5	タ	タ
タ	4	多量の繊維	タ	黒褐色	7	縦文	タ
タ	5	多量の雲母	良 好	タ	5	無文	タ
タ	6	多量の繊維	普 通	タ	6	条痕文	タ
タ	7	少量の長石	良 好	明白灰色	5	隆帯 刻目	タ
タ	8	タ	タ	茶褐色	4	無文	タ
タ	9	多量の繊維	普 通	黒褐色	5	タ	タ
タ	10	タ	タ	赤褐色	7	縦文	タ
タ	11	多量の長石	良 好	黒褐色	9	沈線	タ
タ	12	タ	タ	タ	5	無文	タ

第2表 出出土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ (mm)	文 様 の 特 徴	備 考
10	1	多量の雲母	良 好	茶褐色	6	隆帯 縄文	第3号住居址
*	2	*	*	*	6	*	*
*	3	*	*	*	6	*	*
*	4	多量の長石	*	黒褐色	5	無文	*
*	5	*	*	*	6	細線	*
*	6	少量の長石	*	茶褐色	5	*	*
*	7	少量の雲母	普 通	黒褐色	6	刻目 無文	*
*	8	多量の雲母	*	*	5	沈線	*
*	9	多量の長石	良 好	*	6	刻目 無文	*
*	10	多量の纖維	普 通	赤褐色	10	縄文	*
*	11	*	*	茶褐色	8	*	*
*	12	*	*	白灰色	7	*	*

第3表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ (mm)	文 様 の 特 徴	備 考
11	1	少量の雲母	普 通	赤褐色	6	陸帯 刻目	第4号住居址
*	2	少量の長石	*	*	7	*	*
*	3	少量の雲母	良 好	黒褐色	5	細線 刻目	*
*	4	*	*	*	4	無文	*
*	5	*	*	茶褐色	5	細線	*
*	6	多量の長石	普 通	白灰色	5	*	*
*	7	*	良 好	茶褐色	2	無文	*
*	8	多量の纖維	普 通	赤褐色	5	*	*
*	9	多量の長石	良 好	白灰色	4	細線	*
*	10	少量の雲母	*	黒褐色	5	*	*
*	11	多量の長石	普 通	茶褐色	6	無文	*
*	12	多量の纖維	不 良	黒褐色	9	縄文	*

第4表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ (mm)	文 様 の 特 徴	備 考
12	1	多量の長石	良 好	明白灰色	7	隆帯 縄文	第5号住居址
*	2	多量の雲母	*	黒褐色	5	無文	*
*	3	多量の長石	普 通	茶褐色	6	*	*
*	4	*	良 好	黒褐色	5	*	*
*	5	少量の長石	普 通	茶褐色	6	*	*
*	6	多量の長石	不 良	*	6	*	*
*	7	少量の長石	良 好	黒褐色	5	細線	*
*	8	多量の纖維	不 良	*	9	縄文	*
*	9	*	*	*	8	縄文 隆帯	*
*	10	*	*	*	8	縄文	*
*	11	*	*	*	9	*	*
*	12	少量の雲母	良 好	白灰色	5	無文	*

第5表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
13	1	少量の長石	良 好	黄褐色	7	無文	第6号住居址
*	2	ク	・	白灰色	4	・	・
*	3	ク	・	・	5	・	・
*	4	ク	・	茶褐色	7	・	・
*	5	多量の繊維	不 良	赤褐色	6	縄文	・
*	6	少量の長石	良 好	明茶褐色	6	無文	・
*	7	多量の雲母	善 通	ク	4	・	・
*	8	少量の繊維	・	ク	6	沈線	・
*	9	ク	・	黒褐色	6	条痕	・
*	10	少量の長石	ク	ク	6	・	・
*	11	ク	・	ク	6	無文	・

第6表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
14	1	少量の雲母	良 好	明黄褐色	5	土師器	第7号住居址
*	2	ク	・	赤褐色	6	・	・
*	3	ク	・	明赤褐色	5	・	・
*	4	多量の雲母	・	明黄褐色	7	・	・
*	5	少量の雲母	・	・	4	・	・
*	6	ク	・	茶褐色	5	・	・
*	7	少量の長石	・	ねずみ色	4	須恵器	・
*	8	ク	・	ク	5	・	・
*	9	ク	・	ク	4	・	・
*	10	ク	・	ク	4	・	・
*	11	ク	・	白灰色	3	灰釉陶器	・
*	12	ク	・	ク	3	・	・

第7表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
15*	1	多量の長石	良 好	明茶褐色	5	土師器	第8号住居址
*	2	ク	・	赤褐色	6	・	・
*	3	ク	・	明茶褐色	5	・	・
*	4	多量の雲母	善 通	黒褐色	10	・	・
*	5	ク	・	明黄褐色	6	・	・
*	6	多量の長石	・	明赤褐色	5	・	・
*	7	少量の長石	良 好	ねずみ色	6	須恵器	・
*	8	ク	・	ク	4	・	・
*	9	ク	・	ク	5	・	・
*	10	ク	・	灰白色	4	灰釉陶器	・

第8表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
15	1	多量の雲母	良 好	黒褐色	7	土師器	第9号住居址
タ	2	タ	善 通	明黄褐色	6	タ	タ
タ	3	タ	タ	赤褐色	7	タ	タ
タ	4	タ	良 好	黄褐色	6	タ	タ
タ	5	多量の長石	善 通	赤褐色	7	タ	タ
タ	6	多量の雲母	タ	タ	9	タ	タ
タ	7	タ	良 好	タ	6	タ	タ
タ	8	タ	善 通	黒褐色	7	タ	タ
タ	9	少量の長石	良 好	ねずみ色	6	須恵器	タ
タ	10	タ	タ	タ	4	タ	タ

第9表 出土土器の形状一覧表

第2節 石 器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版、番号、名称、器形、石質、備考である。
(飯塚 政美)

図版	番号	名 称	器 形	石 質	備 考
17	1	磨 石		硬砂岩	第3号住居址
タ	2	礫 器		タ	タ
タ	3	剥片石器		タ	第4号住居址
タ	4	タ		タ	第5号住居址
タ	5	タ		タ	タ
タ	6	砾 石		頁岩	グリット

第10表 出土石器の形状一覧表

第IV章 まとめ

本遺跡では合計9軒の竪穴住居址が発見され、そのうち、6軒は縄文早期末葉から縄文前期初頭にかけての住居址、3軒は平安時代の住居址であった。本遺跡地の地形は南側は藤沢川の左岸河岸段丘面、山麓扇状地の合わさった面に存在し、傾斜は西から東へかなりの角度を持っている。西端には中央高速道路が走り、わが国の道路状況を象徴しているかのようであった。本遺跡地の近くには、東田遺跡、下小出原遺跡、天伯遺跡、藤沢川をはさんだ南側には井の久保遺跡、山の下遺跡、菖蒲沢遺跡等々が存在している。

遺構はかなり限られた範囲に集中しておった。具体的には第1～6号住居址が1グループ、第8・9号住居址が1グループ、第7号住居址が1グループであった。縄文時代の住居址は6軒で、それは第1～6号住居址、平安時代のそれは第7～9号住居址であった。

次に各住居址の諸特徴について簡潔に述べてみたいと思う。第1号住居址から第6号住居址は縄文早期末葉から前期初頭に位置づけられ、全てが切り合い関係になっているために、その全体は把握できなかった。従って、プラン及び、その規模の正確なる数値はのぞめなかった。切り合い関係等についても第II章遺構のところで説明を加えておいたので、今回は割愛させていただくことにする。遺物については図版8から図版12に記載してあるように薄手指痕細線文土器の一群であることには間違いない。この土器群は東海系のものが大部分であるが、それに混じって関東系のも若干みられた。前者のものとしては編年上で言われている天神山式、塩屋式、木島I、木島II式、後者のものとして、花積下層式、関山式等である。石器に於いては硬砂岩系のものはこの時期に該当すると思われる。

第7号・8号住居址は平安時代の竪穴住居址であって、隅九方形プランを呈し、その規模は第7号では4m前後、第8号で5m前後を測定できる。床面上では第8号住居址には火災にあったと思われる多量の焼土や木炭が検出された。さらに北西の一角には防風用のビットがみつかった。この例は第9号住居址にもみられ、この事実は奈良・平安時代を通して、西方の山麓からの風当りが、かなり強力であったものと思われる。カマドの位置は前に述べたような事実からして東側に存在することは極てあたりまえのことであろう。3つの住居址のうちでは第8号住居址のカマドは保存状態が良好で、天井石、両袖部、支脚石、及び煙道もきれいに残存していた。遺物については第7号住居址、第8号住居址は須恵器、土師器、灰釉陶器が出土した。これらは10世紀後半から11世紀前半の時期に位置づけられると思われる。

第9号住居址の土師器、須恵器は8世紀後半から9世紀前半に位置づけが可能と思われる。

(飯塚 政美)

図 版



遺跡地を北側より眺む



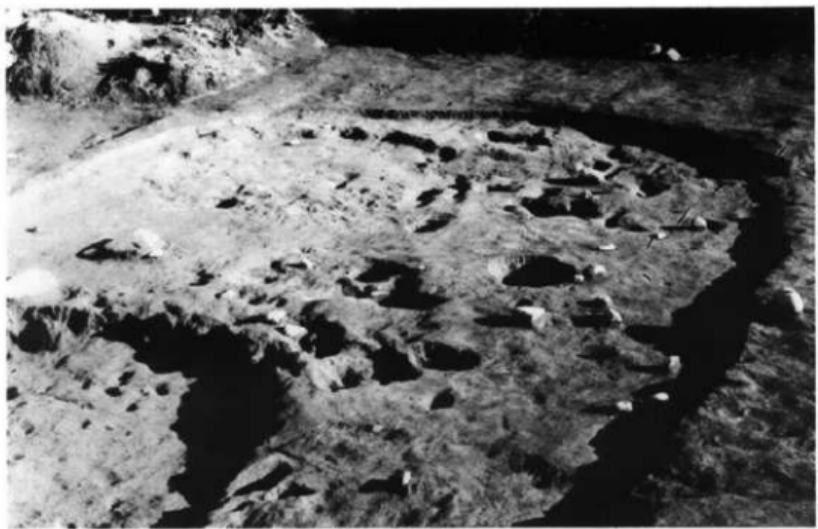
遺跡地を南側より眺む



遺構配置（北側より）



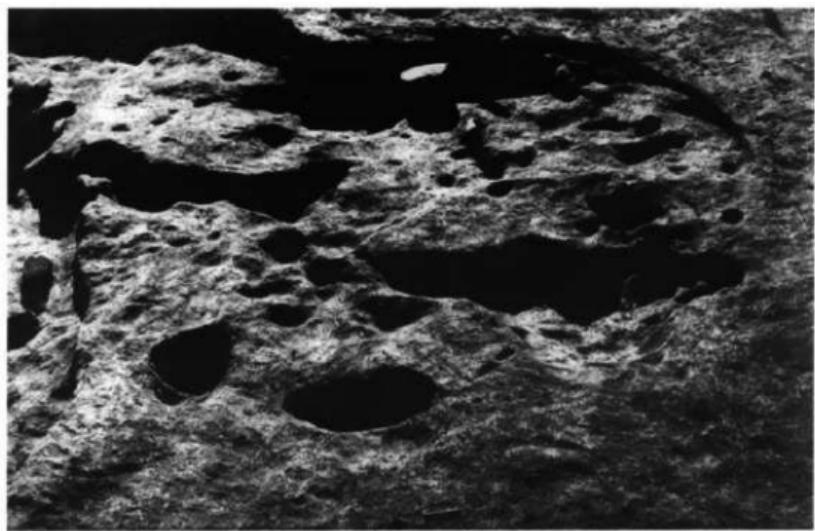
第1・2号住居址



第3・4号住居址



第5号住居址



第6号住居址



第7号住居址



第8号住居址



第8号住居址



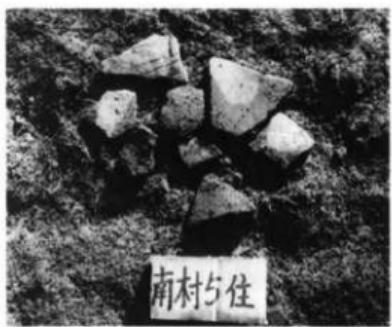
第7号住居址カマド



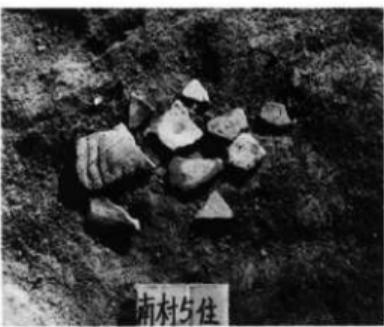
第8号住居址カマド



第9号住居址カマド



土器出土状况



土器出土状况



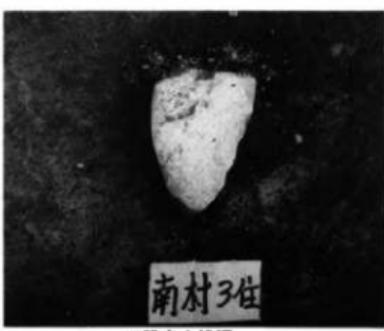
土器出土状况



土器出土状况

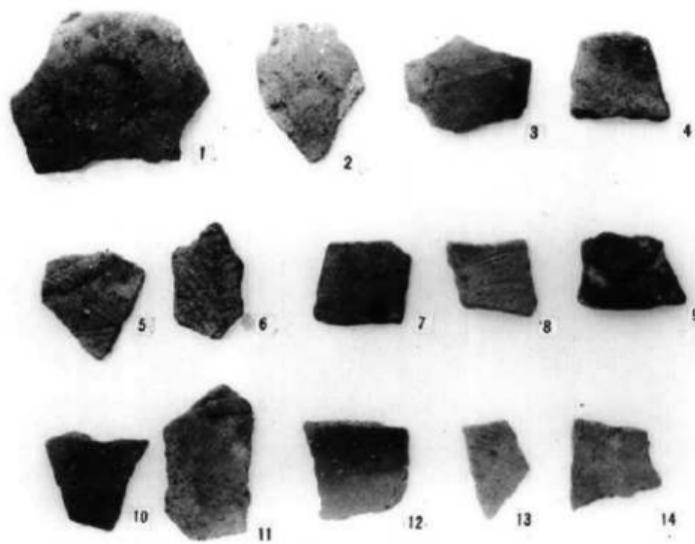


石器出土状况

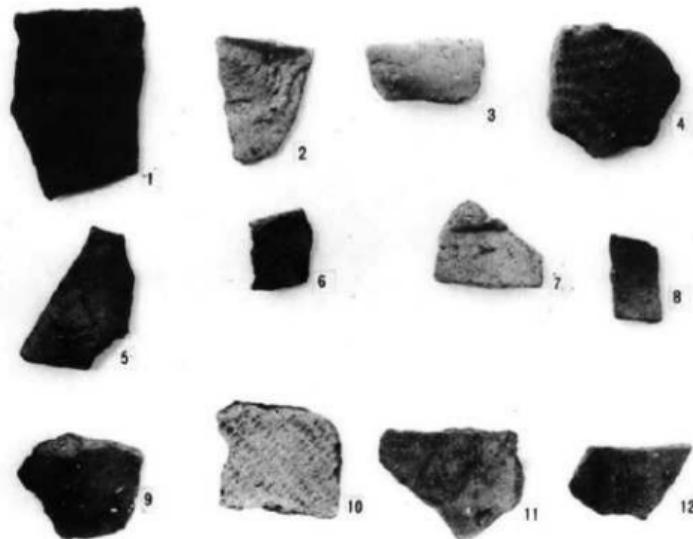


石器出土状况

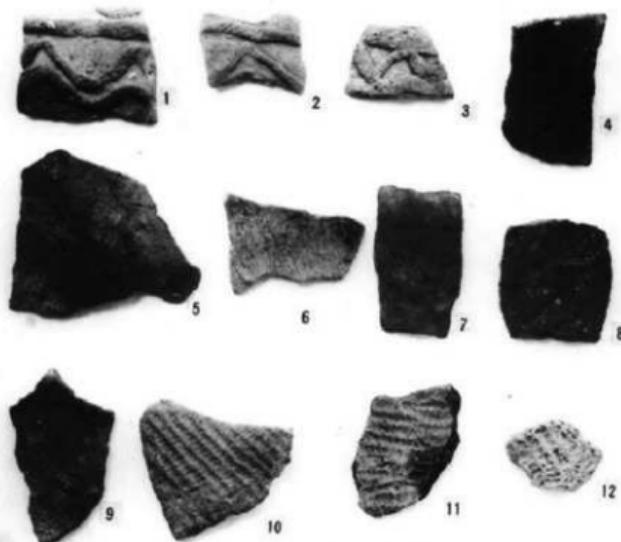
图版 7 遗物出土状况



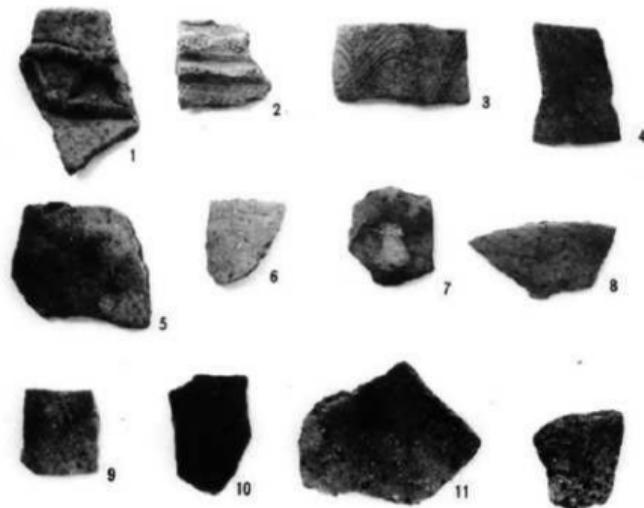
図版8 出土土器



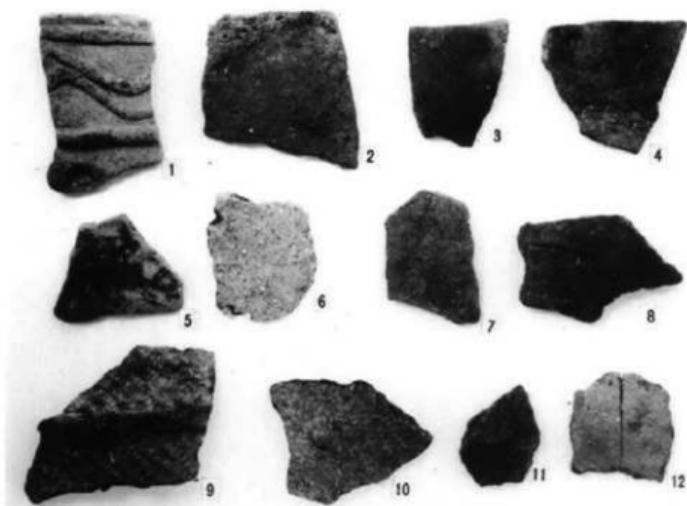
図版9 出土土器



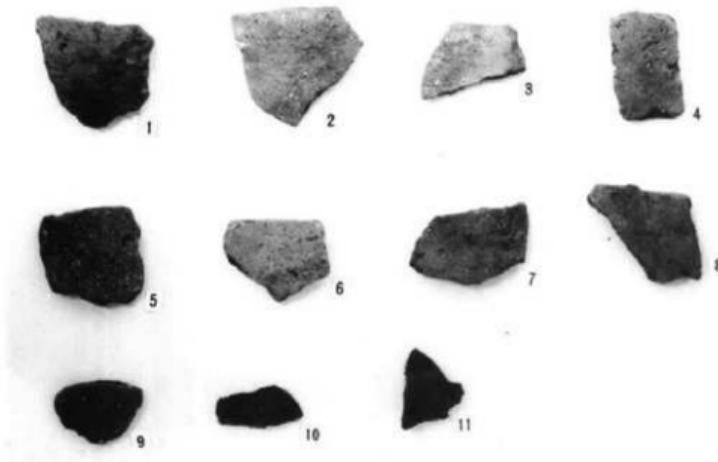
図版10 出土土器



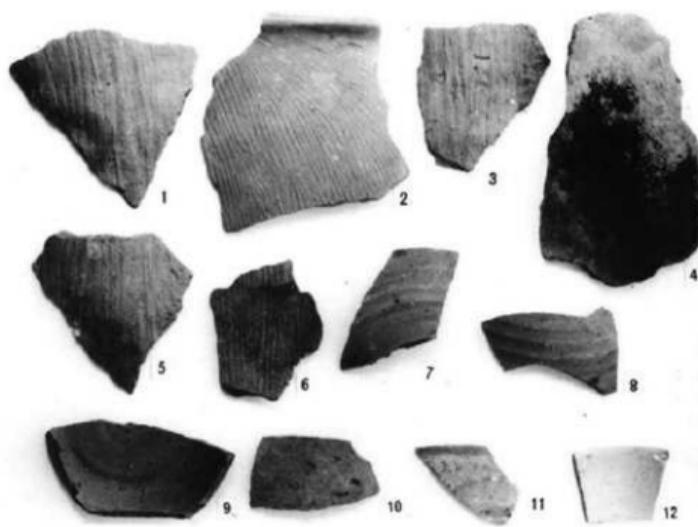
図版11 出土土器



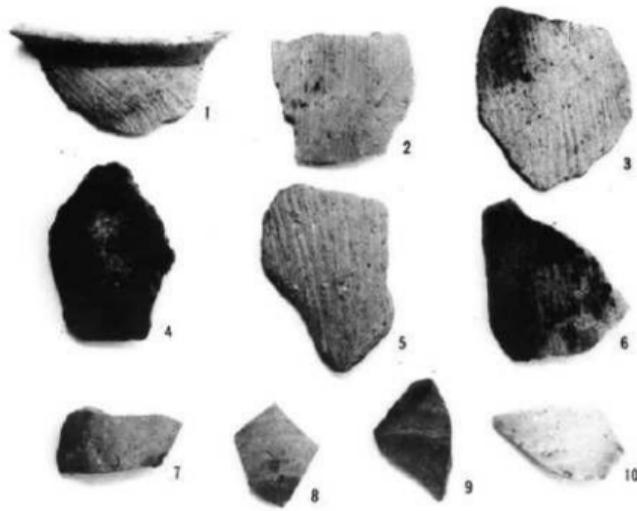
図版12 出土土器



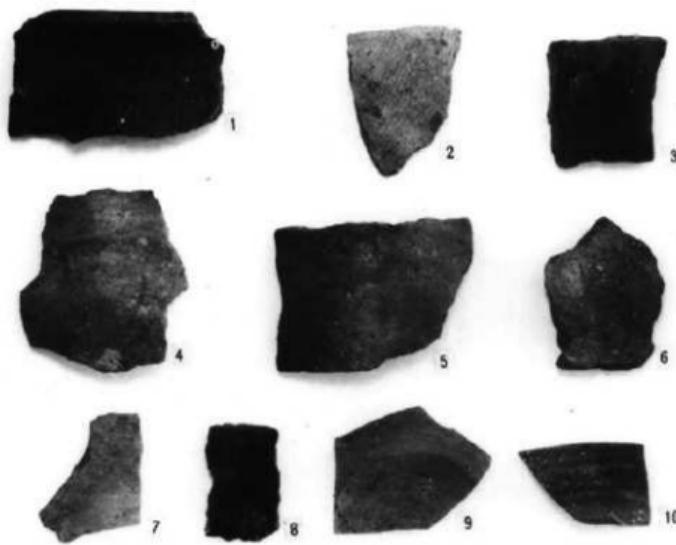
図版13 出土土器



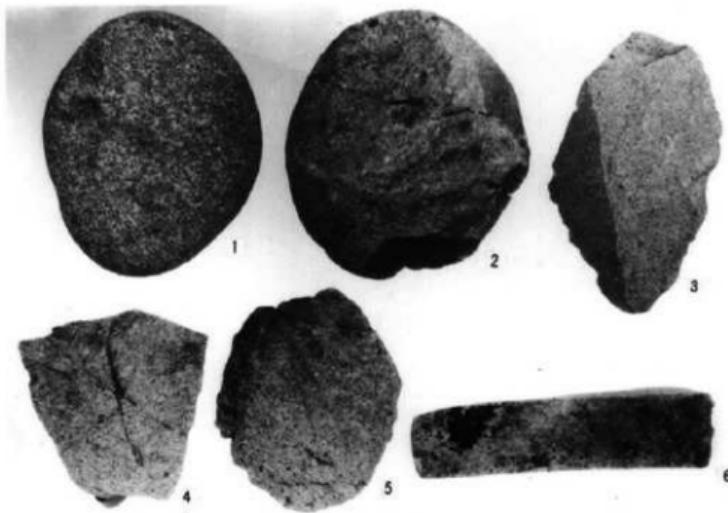
図版14 出土土器



図版15 出土土器



図版16 出土土器



図版17 出土石器

南村遺跡

——緊急発掘調査報告——

昭和54年3月15日 印刷

昭和54年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

長野県伊那市下諏訪町広瀬町

印刷所 ブラウニエ印刷

東 田 遺 跡

目 次

目 次	(1)
挿図目次	(2)
表 目 次	(3)
図版目次	(3)
第Ⅰ章 発掘調査の経過	(4~6)
第1節 発掘調査の経緯	(4)
第2節 調査の組織	(4)
第3節 発掘日誌	(5~6)
第Ⅱ章 遺 構	(7~20)
第1節 住居址	(7~12)
第2節 柱穴群	(13)
第3節 土 坂	(14~20)
第Ⅲ章 遺 物	(21~23)
第1節 土 器	(21~23)
第2節 石 器	(23)
第Ⅳ章 ま と め	(24)

挿 図 目 次

第1図	造構配置図	(7 ~ 8)
第2図	第1号住居址実測図	(9)
第3図	第1号住居址埋甃断面図	(10)
第4図	第2号住居址・第6号土塙・第9号土塙・第13号土塙実測	(10)
第5図	第3号住居址・第20号土塙実測図	(11)
第6図	第4号住居址実測図	(12)
第7図	第4号住居址カマド実測図	(13)
第8図	第1号柱穴群実測図	(13)
第9図	第1号土塙実測図	(14)
第10図	第2号土塙実測図	(17)
第11図	第3号土塙実測図	(17)
第12図	第4・10・11号土塙実測図	(17)
第13図	第5号土塙実測図	(18)
第14図	第7号土塙実測図	(18)
第15図	第8号土塙実測図	(18)
第16図	第12号土塙実測図	(18)
第17図	第14号土塙実測図	(18)
第18図	第15号土塙実測図	(19)
第19図	第16号土塙実測図	(19)
第20図	第17・19号土塙実測図	(19)
第21図	第18号土塙実測図	(19)
第22図	第21号土塙実測図	(20)
第23図	第22号土塙実測図	(20)
第24図	第23号土塙実測図	(20)
第25図	第24号土塙実測図	(20)

表 目 次

第1表	土塙要目一覧表(抄)	(15~16)
第2表	出土土器の形状一覧表	(21)
第3表	出土土器の形状一覧表	(21)
第4表	出土土器の形状一覧表	(22)
第5表	出土土器の形状一覧表	(22)
第6表	出土土器の形状一覧表	(22)
第7表	出土土器の形状一覧表	(23)
第8表	出土石器の形状一覧表	(23)
第9表	出土石器の形状一覧表	(23)

図 版 目 次

図版1	遺跡全景
図版2	遺構
図版3	遺構
図版4	遺構
図版5	遺構
図版6	遺構
図版7	遺構
図版8	遺構
図版9	遺物出土状況
図版10	出土土器
図版11	出土土器
図版12	出土土器
図版13	出土土器
図版14	出土土器
図版15	出土土器
図版16	出土石器
図版17	出土石器

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

西春近地区の西部開発事業（県営畑地帯総合土地改良事業）は昭和48年度の上島、東方部落、昭和49年度の東方、村岡、城、山本部落にわたって行なわれてきました。昭和51年度は沢渡の上段（眼子田原）地区が該当しました。昭和52年度は南小出、宮の原、中村部落にかけて行なわれました。本年度は柳沢地区と白沢、南小出地区が該当し、特に柳沢地区の東田遺跡は水田が多いために稲の収穫状況を見て、発掘調査にかかるという当初からの計画通り11月上旬から着手いたしました。

発掘着工以前に南信土地改良事務所より委託する旨が伊那市教育委員会へ通知されました。市教育委員会では、その件について承諾しましたので、市教育委員会を中心に、東田遺跡発掘調査会を結成し、この中に調査団を含めて業務を行ふことにしました。

南信土地改良事務所長と市長との間で『埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約書』を締結し、契約後、ただちに発掘準備にとりかかった。

第2節 調査の組織

東田遺跡発掘調査会

調査委員会

委員長	伊沢 一雄	伊那市教育委員会教育長
副委員長	福沢 総一郎	伊那市文化財審議委員会委員長
委員	赤羽 映士	伊那市教育委員長
◆	向山 辻雄	南信土地改良事務所長
調査事務局	石倉 俊彦	伊那市教育委員会社会教育課長
◆	有賀 武	◆ 課長補佐
◆	米山 博章	◆ 係長
◆	三沢真知子	◆ 主事

発掘調査団

団長	友野 良一	日本考古学协会会员
副団長	根津 清志	長野県考古学会会员
◆	御子柴泰正	◆
調査員	飯塙 政美	◆
◆	田畠 長雄	◆
◆	福沢 幸一	◆
調査補助員	平沢 公夫	

第3節 発掘日誌

昭和53年11月1日 本日、午前中一杯かかって、前の現場より道具の運搬をする。前の現場より今度の現場までは歩いて10分程だったので、作業員達皆んなで、発掘器材を運搬してもらう。午後テントを建てる。テントは南北に長く建てる。これは休息用のものとする。

昭和53年11月2日 遺跡分布地はかなりの広範囲にわたっていたが、予算上限られているので、できるだけ遺物及び遺構集中地区を確認するためにグリットを入れてみる。現在は、水田となっていたが、もとはかなり西から東への傾斜のために、東へいく程深くて、ローム層まで、深いところで2mを越していた。

昭和53年11月4日 グリットを入れていく段階で、住居址の確認が、できたので、これを第1号住居址と命名する。さらに、本址の南側へグリットを入れてみると、同様に落ち込みがみられ、これを第1号土塙、第2号土塙と命名する。

昭和53年11月6日 第1号住居址、第1号土塙、第2号土塙の掘り下げを開始する。第1号住居址を掘り下げていくと、炭化物の検出がかなりみられた。本址は加曾利E期の古い方の住居址で、周溝が見事に回わっていた。典型的な4本柱であった。第1号土塙よりは胡桃の炭化物が、第2号土塙では土器が伏った状態で、それぞれ出土したのが極だった特徴であった。

昭和53年11月7日 第1号土塙、第2号土塙及び第1号住居址の完掘をする。さらに、本遺跡地で地形的に最も出土しそうな地点へ、ブルトーザーを入れて、耕土剥ぎを実施してもらう。

昭和53年11月8日 昨日、耕土した地区を水田ごとに区をわかる。テントを設営した西側の水田をI区と、その一段下った南側の水田をII区、東側をIII区、さらに、一段下った東側の水田をIV区V区と決める。まず、第I区の西から東へA～G南から北へ1～11と各グリットを設定していくと土塙が各所にわたって検出され、同じように通し番号で第3号土塙から第13号土塙と、さらに第9号土塙の西側は住居址となり第2号住居址とそれぞれ決める。グリット番号は第3号土塙C3、第4号土塙C6、第5号土塙A7、第6号土塙C8、第7号土塙B7、第8号土塙C9、第9号土塙



発掘風景

E9, 第10号土塙C5, 第11号土塙C5, 第12号土塙B4, 第13号土塙D8であった。第13号土塙は第2号住居址の炉の下につくられていた。第3号土塙から第13号土塙まで完掘する。第9号土塙は床面まで、極めて深かった。

昭和53年11月10日 第2号住居址の完掘をする。第Ⅱ区にグリットを設ける。南北に1～9、西から東へA～Hと決める。第14号土塙から第20号土塙が検出され、本日中にはほぼ完掘終了、グリット名は第14号土塙A7, 第15号土塙C8, 第16号土塙C9, 第17号土塙E3, 第18号土塙E5, 第19号土塙D3, 第20号土塙G6であった。F9～H9のグリットにかけて、方形の黒土の落ち込みがみられ、第3号住居址とする。またC6～E8のグリットにかけて数多くのピットが発見され、第1号柱穴群とする。第Ⅲ区にグリットを設ける。D1～F1 C3～F3 C2～F2, 方形の黒土の落ち込みや、焼土が検出され、第4号住居址とする。さらに同住居址の北側に2カ所に土塙が見つかり、西側のを第21号土塙、東側のを第22号土塙とする。さらに第V区から第23号土塙が検出された。

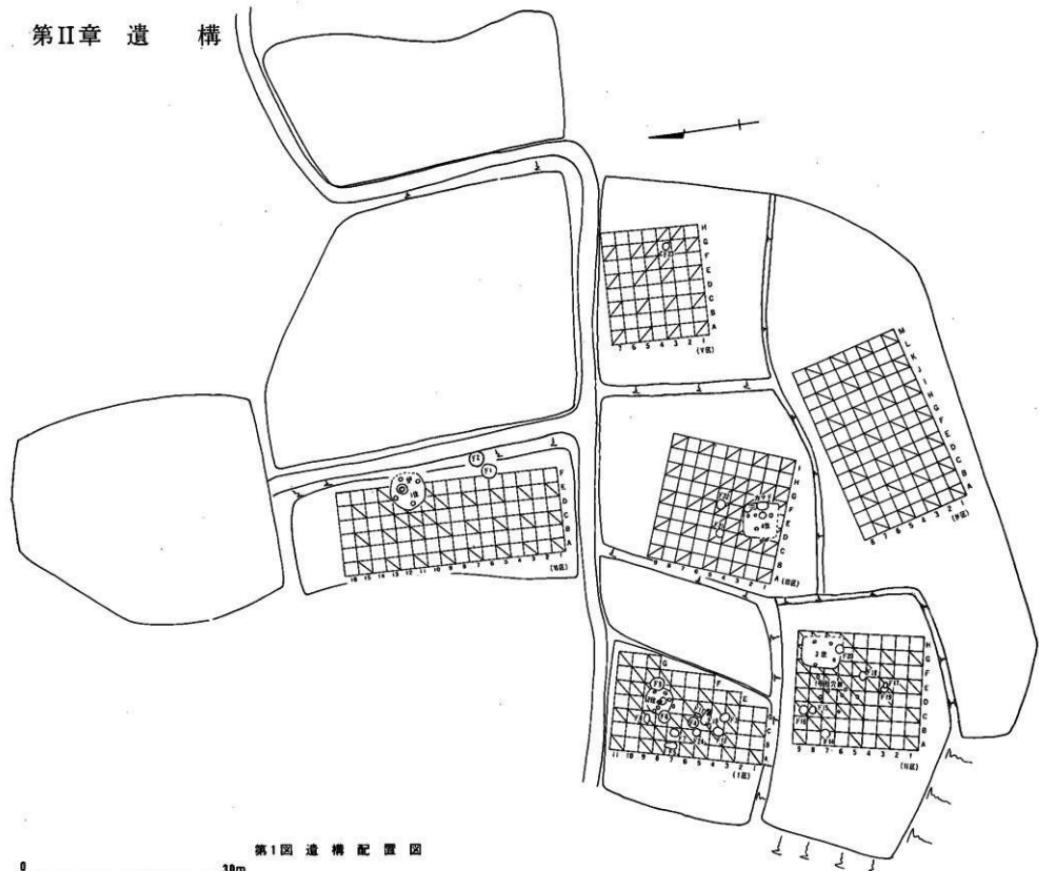
昭和53年11月11日 第14号土塙から第23号土塙までの完掘。第3号住居址、第4号住居址の完掘をする。第4号住居址は東壁にカマドをもつ平安時代の住居址であった。

昭和53年11月13日 本日は一齊に、第1号土塙から第24号土塙及び第1号柱穴群、第1号住居址第2号住居址、第3号住居址、第4号住居址の全ての清掃を終え、その写真撮影をする。第1号住居址から第4号住居址の平面及び断面実測、第1号土塙から第5号土塙の実測。

昭和53年11月14日 第6号土塙から第24号土塙までの実測、全測図の作製。

(飯塚政美)

第II章 遺構



第1図 遺構配置図

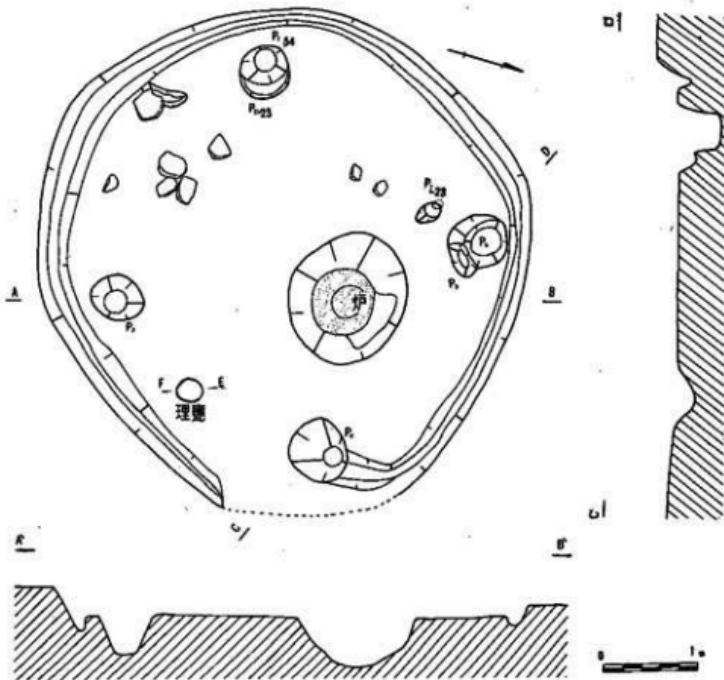
0 30m

第1節 住居址

第1号住居址 (第2~3図、図版3・5)

本址は第Ⅳ区E 10~E 13, F 10~F 13のグリットにかけて、全体的にみるとならば最も北側の位置に発見され、東西5m 80cm、南北5m 20cm程の規模を持ち、ローム層を掘り込んだ円形プランの竪穴住居址である。壁は西側が高くて、50cm、東側の一部は水田造成のおりに破壊されたとみえて残存していないかった。壁面は外傾気味で凹凸があり、軟弱となっていた。床面はかたいタタキでわずかに凹凸があり、幅10~15cm位、深さ20~30cmの周溝が大般全周していた。柱穴は7カ所発見されたが、そのうち主柱穴となりえるのはP₁, P₃, P₄, P₆の四本で、それらは規則的に配列されている。炉は住居址の中央部よりやや北寄りに位置し、形状はすりばち状になっており、炉壁や炉底に多量の焼土や木炭が検出された。

遺物は北壁の周溝のなかにミニチュア土器、南東の位置に正位の状態で埋甕が出土した。この土器は底部まで残っており、土器内に黒色土が充満していた。この黒色土のなかへ、わずかに、焼土や炭化物が混合していた。埋甕より本址は加曾利E期の住居址と思われる。



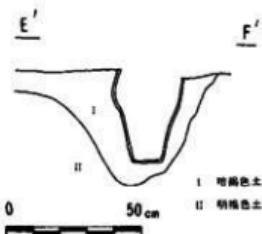
第2図 第1号住居址実測図

第2号住居址（第4図、図版3・5）

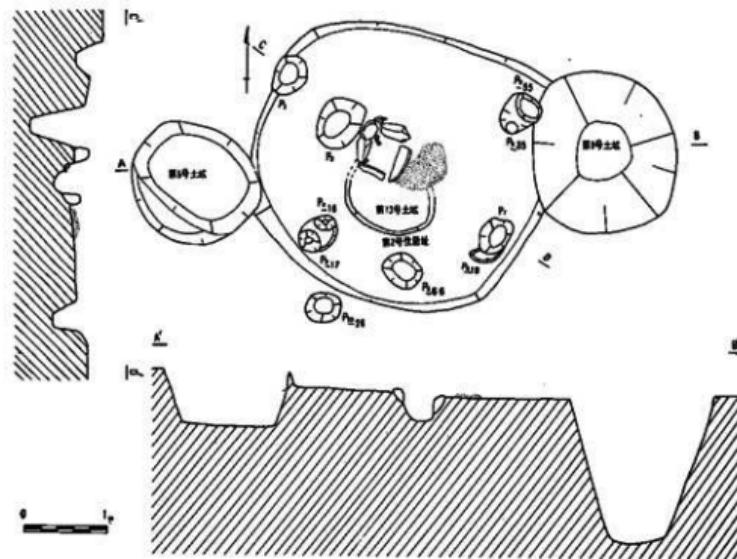
本址は第I区のC 8～C 9, D 7～D 9, E 7～E 9のグリットにまたがって、また、東側で第9号土塙、西側で第6号土塙にそれぞれ切られている。ローム層を掘り込み、円形プランを呈した竪穴住居址である。規模は南北3m 43cm、東西は（推定するに）3m 70cm程を測定できる。壁は凹凸が著しく、軟弱であり、高さは10cm前後と割合に低かった。

床面はローム層面に構築され、凹凸が認められ、軟弱であった。ピットは10カ所確認され、主柱穴となり得るのはP₁、P₅、P₇、P₉であり、他は補助穴と思われる。炉の位置は住居址の中央部より、やや北西にあり、南北66cm、東西65cm程を測定できる方形の石圍炉である。炉石は花崗岩を利用してある。炉の東側には多量の焼土と炭化物の検出をみた。炉は第13号土塙の上に貼床して構築したものであった。したがって、第13号土塙の方が本址より古いことは歴然としている。

遺物は縄文中期後葉、加曾利E期の住居址と思われる。



第3図 第1号住居址埋甃断面図

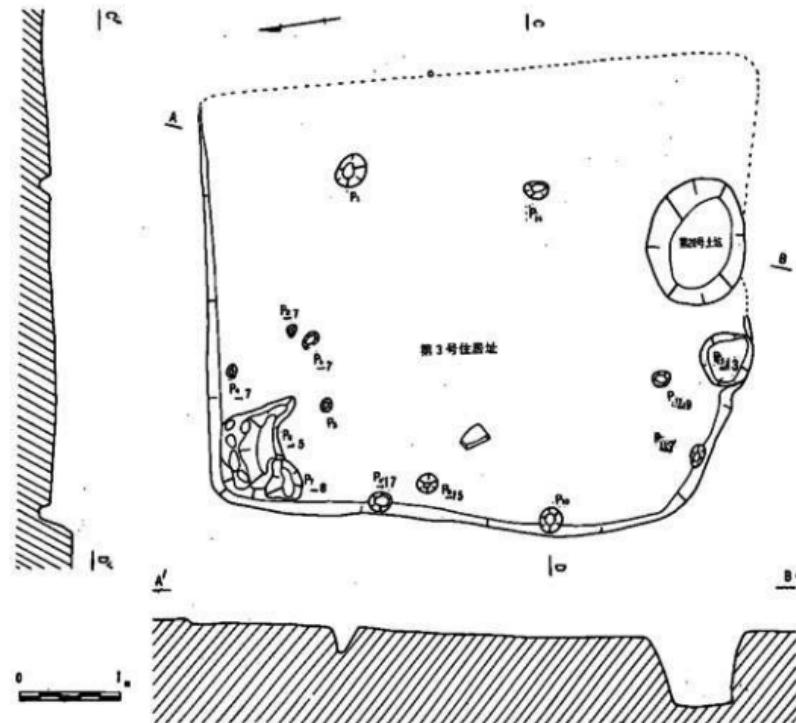


第3号住居址（第5図、図版4）

本址は第II区、F 7～F 9、G 7～G 9、H 7～H 9のグリット内に、また南側で第20号土塁に切られたような状態で発見された。壁は東側と南側の東半分には存在しなかった。ローム層を掘り込み構築された竪穴住居址で、平面形プランは隅丸方形を成している。規模は南北5m 19cm、東西（推定による）4m 60cm程を測定できる。壁高は高いところ10数cm位と極めて低く、外傾し、凹凸が各所にみられ、軟弱であった。床面は若干黒色土混じりのかたいたたきになっており、凹凸は頭著であった。

ピットは各所にわたってみられ、深さは深いでも20cm前後と割合に浅かった。炉らしき跡はどこにも検出されなかった。しかし、床面上には多量の木炭の検出をみた。本址は形態からして、どうも中世的な様相を呈する住居址であった。

遺物は、何も出土しなかった。

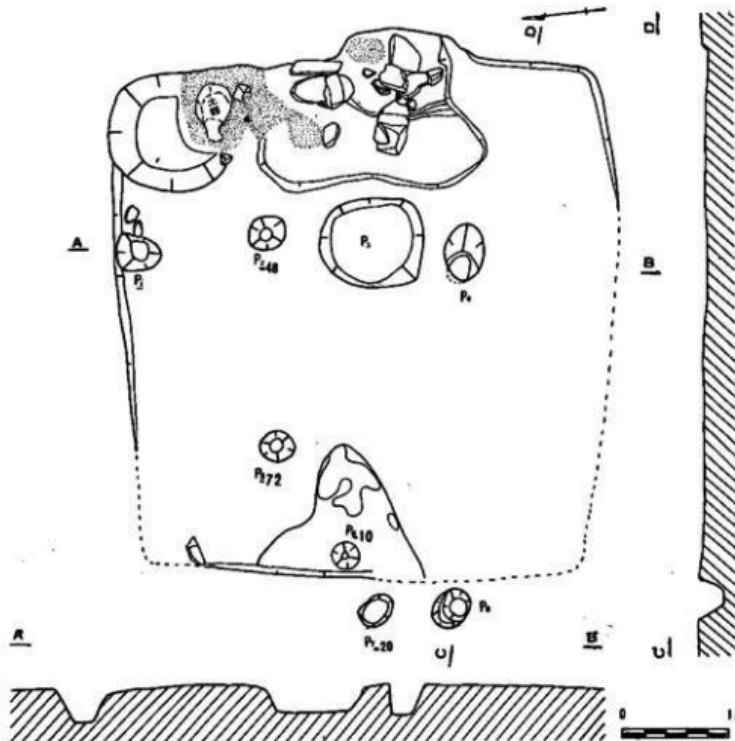


第5図 第3号住居址、第20号土塁実測図

第4号住居址 (第6~7図、図版4~5)

本址は第Ⅲ区の東側の方に発見され、ローム層を掘り込んだ竪穴住居址である。南北4m 60cm、東西5m 8cmの規模を有している。平面プランは隅丸方形であり、壁高は高いところで10cmに満たない。状態は外傾し、軟弱であって、凹凸は各所にみられた。床面は凹凸が顕著で、かたいところは部分的に残されていた。ピットは8カ所発見され、そのうち主柱穴になりうるのはP₂、P₄、P₅の三本であろう。もう1本あったと思われるが南西の位置の柱穴は何かのおりに破壊されたものと思われる。カマドは東壁の中央部附近に位置し、石芯粘土カマドである。両袖部の石の残りは割合に良好であったが、天井石、支脚石はくずれてしまって、その面影はまったくなかった。

遺物はカマド周辺に集中的に出土し、その主なものは土師器、須恵器、灰釉陶器の類であった。
したがって本址は平安時代の住居址と思われる。
(飯塚 政美)



第6図 第4号住居址実測図

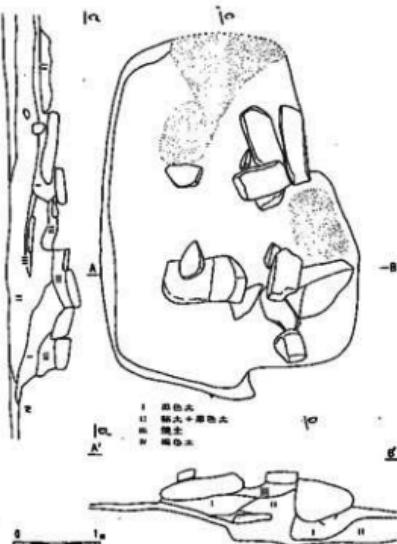
第2節 柱穴群

第1号柱穴群（第8図）

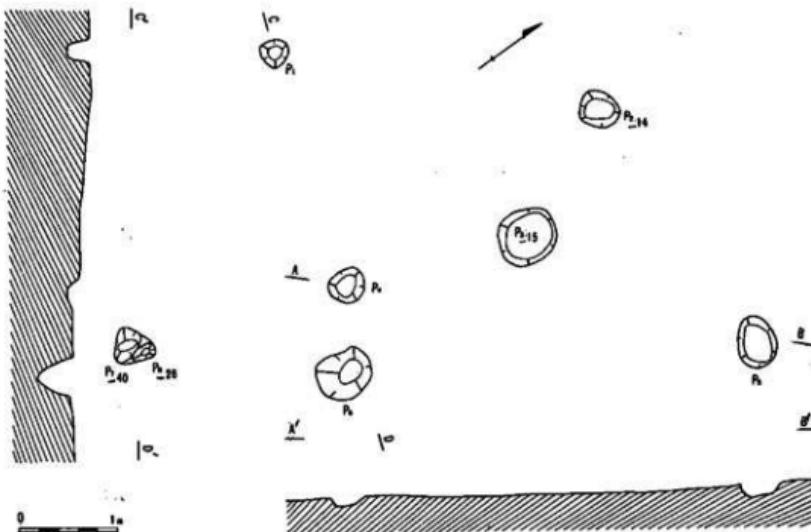
本柱穴群は第II区の第3号住居址の西側に検出された遺構である。ピットの数は全部で8カ所確認されている。その大きさ及び深さを記してみると次のようになる。P₁は30cm×29cm、深さ23cm、P₂は46cm×37cm、深さ14cm、P₃は60cm×56cm、深さ15cm、P₄は37cm×33cm、深さは9cm、P₅は38cm×50cm、深さは13cm、P₆は57cm×50cm、P₇は35cm×23cm、深さは40cm、P₈は20cm×18cm、深さは26cmである。

柱穴群の形状は円形が大部分を占め、わずかに不整円形のものもみられる。本遺構の掘り込み面はローム層である。このローム層は割合に軟弱であった。遺物は何も発見されなかった。

本柱穴群は第3号住居址と間連して中世的色彩が強いように思われる。（友野 良一）



第7図 第4号住居址カマド実測図



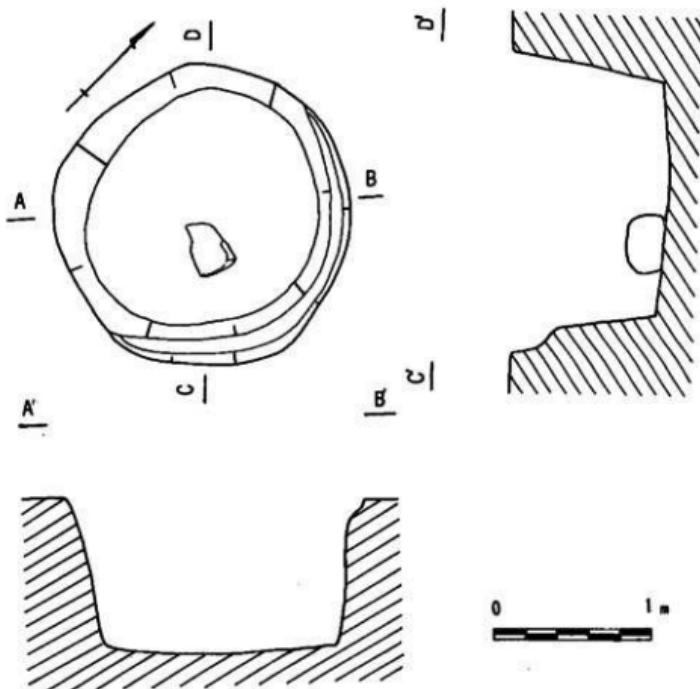
第8図 第1号柱穴群実測図

第3節 土 塚

土塚は発掘区の全面に展開し、全部で24基検出された。土塚の全般的な諸特徴、および諸々の問題等については第1表土塚要目一覧表(抄)に、述べられているので照合されたい。土塚要目一覧表(抄)は、そのプラン・形態・遺構・共伴遺物・特徴等について記し比較的検討に便ならしめた。一覧表の見方については項目的に簡単な内容の説明を附記し、同時に若干の説明をしておくことにする。プランは平面、断面形の2方向から考えてみた。法量は大きさと深さを表示し、状態は床面と壁面を縦密に記しておくことにする。土塚に伴なう附隨的なものとして、ピット、配石の有無を記しておくことにする。

遺物は土器と石器の項目を設けておく、土器はその出土した形、あるいは、その量、及び土器編年上による位置づけをしておく、石器はその名称をつけてある。備考には土塚の諸特徴について、簡潔にしておくことにする。図番号及び図版番号、出土土器図版番号、出土石器図版番号は、その番号のみを記しておくことにする。

(飯塚政美)

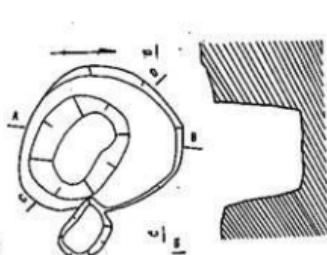
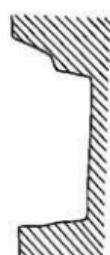
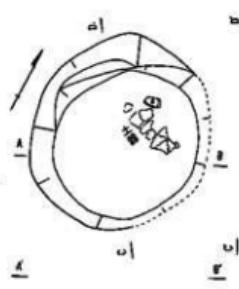


第9図 第1号土塚実測図

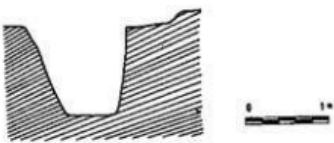
第1表 土塙要目一覧表(抄)

土塙 番号	ブラン		法 量		状 態		小 穴	配石	遺 物		備 考	図 番 号	図版番号	出土土器 図版番号	出土石器 図版番号
	平 面	断 面	径(cm)	深(cm)	床	壁			土器(比定期)	石 器					
1	円形		189×190	99	かなく平	上部細高 下部外傾		あり	加曾利E I E II	環器8・打斧3 磨石2	東壁に段がつく、胡桃出土	9	6	13	17
2	円形		222×207	88	かなく外傾			あり	加曾利E I E II		東壁の一部破壊、北壁に段あり	10	6	14	
3	不整円形	東一部袋状	183×173	105	かなく外傾 直		ピットあり		加曾利E I		底面は長方形	11	6		
4	円形		143×133	94	軟弱 中央凹む	外傾			加曾利E I			12	6		
5	不整円形		110×166	56	かなく外傾				加曾利E I	乳棒状石斧1	南側に段あり	13	6		17
6	円形		140×154	65	かなく外傾 凹凸あり					打斧1	南側に段あり、2住を切る	4	6		
7	円形		121×128	28	軟弱 弱平 外軟弱							14	7		
8	円形		68×74	105	かなく平 外傾 かたい						土塙にしては深い	15	7		
9	円形		190×173	173	かなく 中央凹む 凹凸あり				加曾利E I E II	打斧1	2住を切る。底面は方形	4	7	15	
10	不整円形		133×183	10	軟弱 凹凸あり 弱軟弱	低 弱 外 傾 かた	ピットあり		加曾利E	横刃1	壁の凹凸は少ない	12		15	17
11	不整円形		87×85	19	軟弱 凹凸あり 弱清らか							12			
12	円形		144×139	39	かなく平 弱弱		ピットあり		加曾利E			16		15	
13	円形	一部袋状	90×105	62	かなく 凹凸あり 弱弱						2号住の炉の下にある	4	7		
14	円形		145×123	82	かなく平 外傾 かたい		あり	加曾利E				17	7		
15	円形		114×106	34	かなく 凹凸あり 弱弱							18	7		
16	円形		128×117	38	軟弱 弱 外 傾 弱弱	ピットあり					床面の西側はやや低い	19	8		
17	不整円形		80×75	8	軟弱 弱 外 傾 弱弱		あり				西側で第19号土塙に切られている	20			
18	円形		115×126	89	水平 かな 弱 外 傾 弱弱						底面は長方形	21			
19	長円形	一部袋状	111×86	106	かな 外 傾 かたい						東側で第17号土塙を切っている	20			
20	上 部 円 形		97×124	72	かなく 凹凸あり 上部外傾 下部強直						底面は長方形、第3住の床面を切る	5	8		
21	円形		119×99	72	かなく 外 傾 弱弱						底面は長方形	22	8		
22	円形		130×134	96	かなく 平 すりばち			加曾利E			底面は方形	23	8	15	
23	長円形	一部袋状	131×104	82	かなく 外 傾 弱弱						底面は長方形	24	8		
24	不整円形	一部袋状	120×112	41	かな 凹凸あり 内 弯						底面に段がある	25	8		

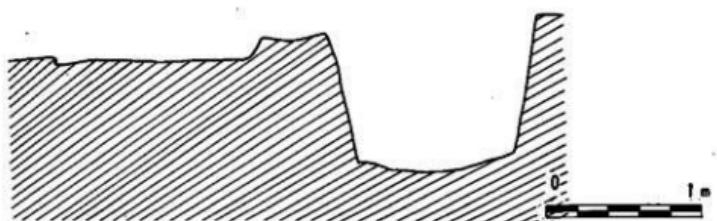
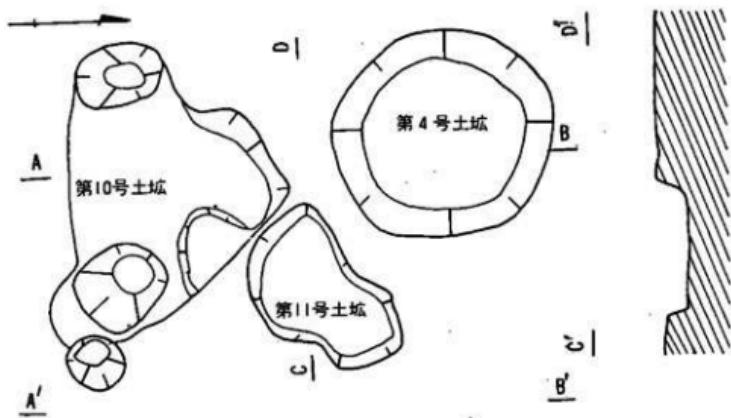




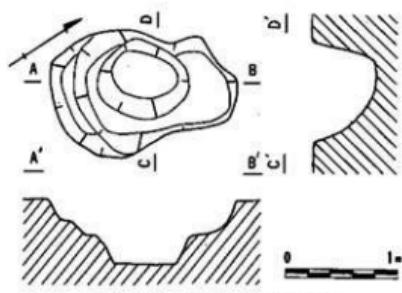
第10図 第2号土塙実測図



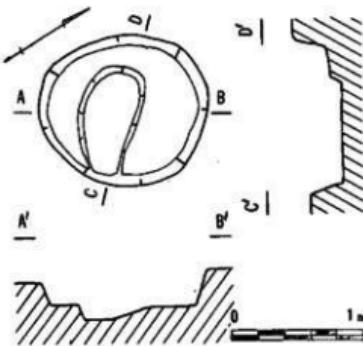
第11図 第3号土塙実測図



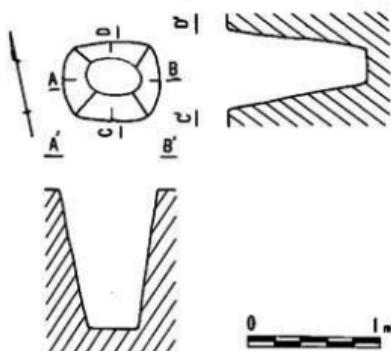
第12図 第4・10・11号土塙実測図



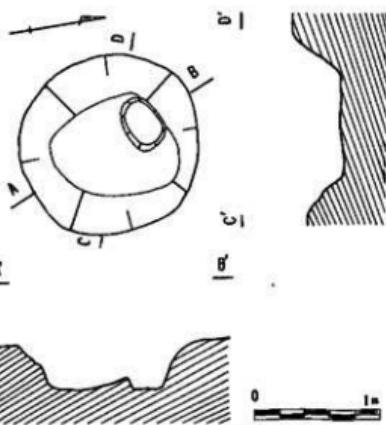
第13図 第5号土塙実測図



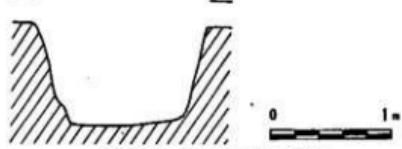
第14図 第7号土塙実測図



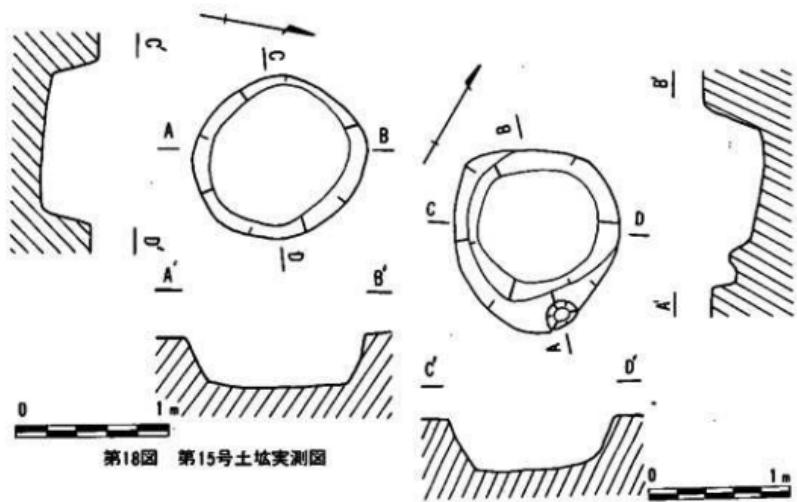
第15図 第8号土塙実測図



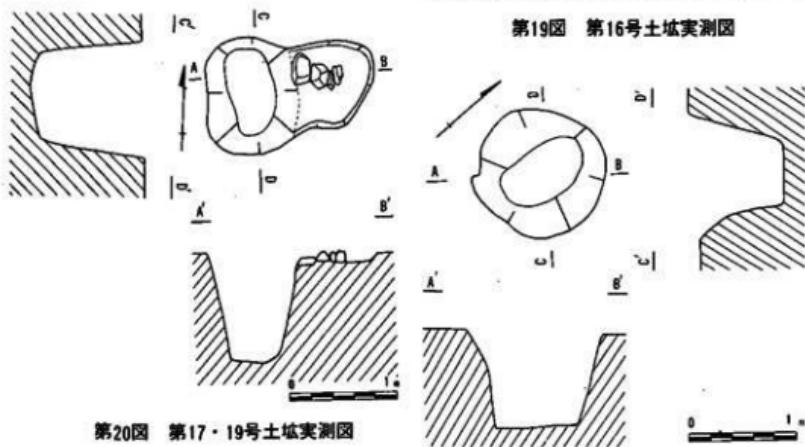
第16図 第12号土塙実測図



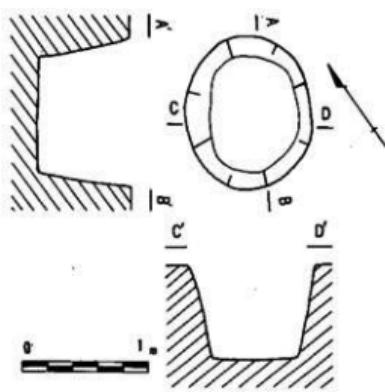
第17図 第14号土塙実測図



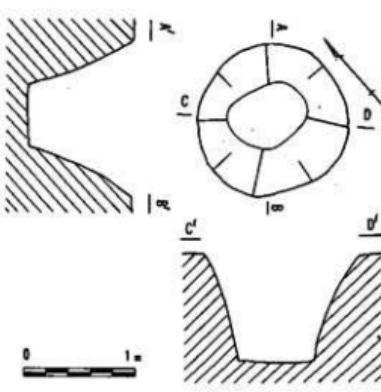
第19図 第16号土塙実測図



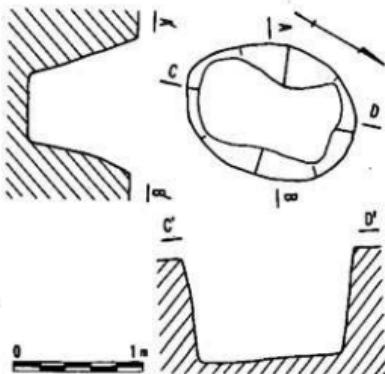
第21図 第18号土塙実測図



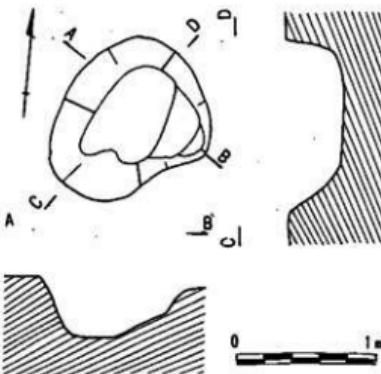
第22図 第21号土塙実測図



第23図 第22号土塙実測図



第24図 第23号土塙実測図



第25図 第24号土塙実測図

第Ⅲ章 遺物

第1節 土器

土器の説明はスペースの関係上表を作製して、一見のもとに理解できるようにした。一覧表の見方について項目別に簡単な内容説明を付記しておくことにする。その項目は図版、番号、胎土、保存状態、色調についての記述は、明らかなる基準によったものではなく、筆者の主觀によるものである。

(飯塚 政美)

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備考
10	1	多量の長石	普 通	明黄褐色	11	隆帶 沈線	第1号住居址
タ	2	多量の雲母	タ	タ	10	*	タ
タ	3	多量の長石	タ	黒褐色	8	沈線	タ
タ	4	多量の雲母	タ	茶褐色	9	隆帶 沈線	タ
タ	5	多量の長石	不 良	明黄褐色	12	隆帶 沈線 織杉文	タ
タ	6	少量の長石	普 通	赤褐色	10	隆線 沈線	タ
タ	7	タ	タ	茶褐色	11	*	タ
タ	8	タ	良 好	黒褐色	8	隆線	タ
タ	9	少量の雲母	不 良	明赤褐色	10	隆帶 刻目 刺突文	タ
タ	10	多量の雲母	普 通	赤褐色	8	隆線 刻目	タ
タ	11	タ	タ	タ	8	*	タ

第2表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
11	1	少量の長石	普 通	茶褐色	8	爪形文 隆線 沈線	第2号住居址
タ	2	少量の雲母	タ	赤褐色	7	隆線 捩文	タ
タ	3	多量の雲母	タ	タ	9	*	タ
タ	4	タ	良 好	茶褐色	7	無文	タ
タ	5	多量の長石	タ	黒褐色	6	隆線	タ
タ	6	少量の雲母	タ	明黄褐色	7	沈線	タ
タ	7	多量の長石	不 良	タ	9	刻目	タ
タ	8	少量の長石	良 好	赤褐色	7	隆線 刻目 繩文	タ
タ	9	タ	タ	タ	8	繩文	タ
タ	10	多量の長石	普 通	黃褐色	10	隆帶 爪形文	タ

第3表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備考
12	1	多量の雲母	良 好	明黒褐色	6	土師器	第4号住居址
+	2	タ	タ	明黄褐色	5	タ	タ
+	3	タ	タ	赤褐色	6	タ	タ
+	4	タ	タ	黒褐色	7	タ	タ
+	5	タ	タ	タ	6	タ	タ
+	6	タ	タ	明赤褐色	7	タ	タ
+	7	タ	タ	明黄褐色	9	タ	タ
+	8	タ	タ	タ	7	タ	タ
+	9		タ	赤褐色	8	タ	タ
+	10		タ	白灰色	6	灰釉陶器	タ
+	11		タ	タ	5	タ	タ

第4表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
13	1	少量の長石	普 通	黒褐色	8	陸線 刺突文	第1号土塙
+	2	タ	タ	赤褐色	6	陸線 沈線	タ
+	3	タ	タ	明黄褐色	8	刺突文	タ
+	4	タ	タ	明白灰色	6	沈線	タ
+	5	多量の雲母	タ	黒褐色	7	陸線 刺突文	タ
+	6	多量の長石	不 良	明黄褐色	10	沈線 細線	タ
+	7	少量の長石	良 好	黒褐色	8	沈線 繩文	タ
+	8	多量の雲母	タ	赤褐色	9	沈線	タ
+	9	多量の長石	不 良	タ	8	陸線 沈線	タ
+	10	タ	良 好	黒褐色	7	陸線 沈線 刺突文	タ

第5表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文様の特徴	備 考
14	1	多量の長石	不 良	赤褐色	8	爪形文	第2号土塙
+	2	タ	良 好	黒褐色	6	陸線 繩文	タ
+	3	タ	タ	明黄褐色	9	陸線 繩文 ハノ字文	タ
+	4	少量の長石	普 通	赤褐色	8	陸線	タ
+	5	多量の長石	タ	明黄褐色	10	陸線 刻目	タ
+	6	少量の長石	タ	赤褐色	6	渦巻文	タ
+	7	タ	不 良	黒褐色	11	繩文 沈線	タ
+	8	タ	良 好	明黄褐色	9	沈線 刺突文	タ
+	9	多量の長石	普 通	黒褐色	8	繩文 沈線 陸線	タ
+	10	タ	タ	茶褐色	7	タ	タ

第6表 出土土器の形状一覧表

図版	番号	胎 土	保存状態	色 調	厚さ(mm)	文 様 の 特 徴	備 考
15	1	少量の長石	普 通	赤褐色	10	隆線 線杉文	第5号土塙
・	2	・	良 好	明黄褐色	6	隆線 刺突文	第7号土塙
・	3	多量の雲母	・	黒褐色	6	細線	第9号土塙
・	4	少量の長石	不 良	赤褐色	9	隆線 沈線	・
・	5	多量の長石	・	・	8	沈線	・
・	6	・	良 好	明白灰色	6	無文	・
・	7	・	普 通	茶褐色	9	隆線 沈線	・
・	8	少量の長石	・	赤褐色	13	無文	第12号土塙
・	9	・	不 良	黄褐色	11	隆線 沈線	・
・	10	・	普 通	・	7	無文	第10号土塙
・	11	・	・	赤褐色	8	繩文	第22号土塙
・	12	・	・	黄褐色	9	隆線 沈線 繩文	・

第7表 出出土器の形状一覧表

第2節 石 器

石器の説明は表を用いることにする。表の項目は図版、番号、名称、器形、石質、備考である。
(飯塚 政美)

図版	番号	名 称	器 形	石 質	備 考
16	1	打製石斧	搬 形	綠泥岩	第1号住居址
・	2	・	・	・	・
・	3	・	・	・	・
・	4	・	短 勾 形	・	・
・	5	・	搬 形	砂 岩	・
・	6	磨 石	・	硬砂岩	・
・	7	棒状石器	・	砂 岩	・
・	8	横刃型	・	硬砂岩	・
・	9	石 錐	・	・	・
・	10	打製石斧	短 勾 形	綠泥岩	・

第8表 出出土器の形状一覧表

図版	番号	名 称	器 形	石 質	備 考
17	1	礫 器	・	硬砂岩	第1号土塙
・	2	・	・	・	・
・	3	・	・	・	・
・	4	打製石斧	短 勾 形	砂 岩	・
・	5	・	・	綠泥岩	・
・	6	磨 石	・	硬砂岩	・
・	7	棒状石器	・	砂 岩	第5号土塙
・	8	剥片石器	・	硬砂岩	第10号土塙

第9表 出出土器の形状一覧表

第IV章 まとめ

東田遺跡は以前に水田造成の折り、また梨栽培の深耕の時にしばしば遺物が出土したという事実を部落の人々から聞いていたので、今回の調査にかける期待は大きなものであった。調査する場所の設定は現況が水田のために、地層下の状態が把握できなかったので、全面にわたり、グリット掘りをこころみた。

その結果で割合に遺物の集中した個所を綿密に発掘調査を実施した。全面的な調査は予算あるいは各種の問題によって実施できなかつたが、調査の結果、一応、問題点となるべき点を取り上げて簡潔に述べてみたいと思う。

A. 東田遺跡の自然的環境

大きいくいて柳沢部落は東側は天竜川第二段丘面、北側は猪の沢川の右岸段丘面、南側は藤沢川の左岸段丘面、西側は山麓線上の四方に囲まれた姿で存在している。当遺跡地はそのなかでも北側は前沢川、南は大洞と言う小河川の間に位置し、東側は2つの小河川が合流して、見事な解析地形を成し、高い段丘を形成している。遺跡存在に重要な問題である水利は当然両河川の水を利用したものと思われる。また南側の大洞の近くには湿地帯の発達が著しい。

B. 各住居址の特徴

今回の発掘調査で検出された住居址は、縄文中期時代に属するもの2軒、平安時代のもの1軒、中世時代のもの1軒であった。最初に、縄文時代から順に特徴を説明していくことにする。縄文時代の住居址は全て円形プランであり、その規模3m-43cmから5m-80cmの範囲内に含まれている。内部施設で最も重要視される炉は第1号住居址では凹み状のもの、第2号住居址は石畳炉であった。埋甕は第1号住居址の南東の壁近くに正位の状態で出土したのみであった。柱穴の配列は第1号住居址では規則的な4本柱に対し、第2号住居址では割合に不規則な配列を成していた。

平安時代の住居址は隅丸方形プランで、カマドは東壁に有し、石組粘土カマドであった。土塙は全部で24基検出され、プランは一部の不整円形を除いて、大般円形状となっていた。規模はまちまちではあるか小さいのでは80数cm、大きいので2m-20数cmで土塙とすれば通常的であった。深さでは第3・8・9・19号のように1mを越し、なかでも第9号土塙は人間の背丈程もあった。形態のなかで、上面は円形であるのに対し、底面は方形状で、壁面は面取りをしてあるようなのも7例あった。これらは如何なる故に下へ行くに従って角張った構築方法をしたのかは疑問の残る点である。

遺物は全般的に縄文中期のものが多く、数例を除いて、本土塙の類は縄文中期の遺構と考えよかろう。全面的な発掘調査をしたわけではないから結論的な考えはできないが、2つの同時代の住居址の周囲に土塙が存在して、一つの小さな集落形態を作っているものと思われる。

図 版



遺跡地を南側より眺む



遺跡地を北側より眺む

図版1 遺跡全景



第Ⅰ区全景



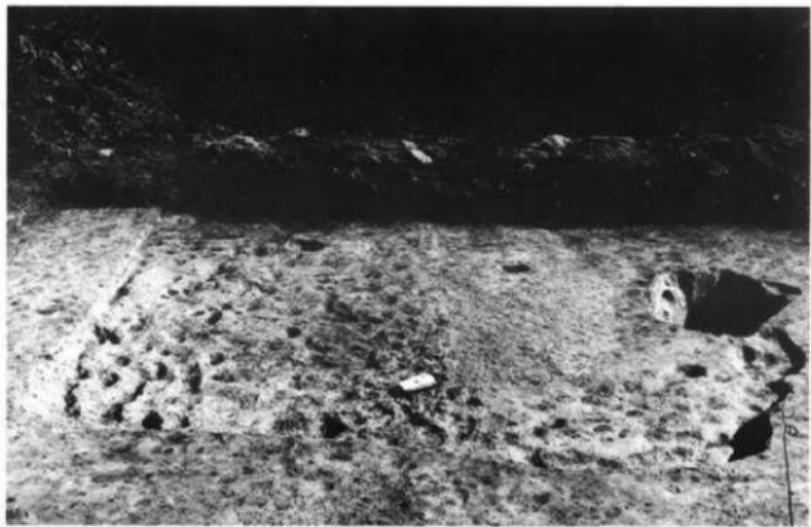
第Ⅱ区全景



第1号住居址



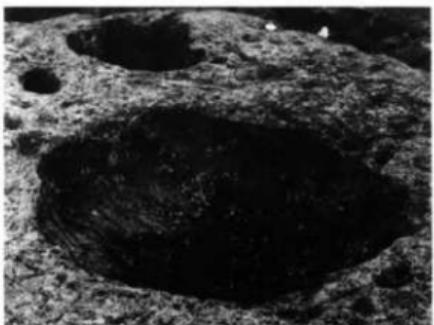
第2号住居址



第3号住居址・第20号土塙



第4号住居址



第1号住居址炉址



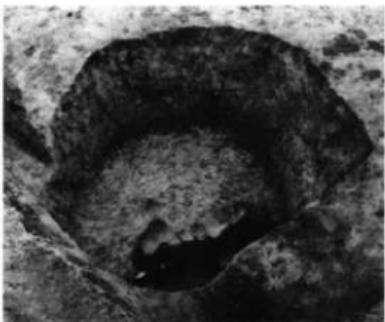
第2号住居址炉址



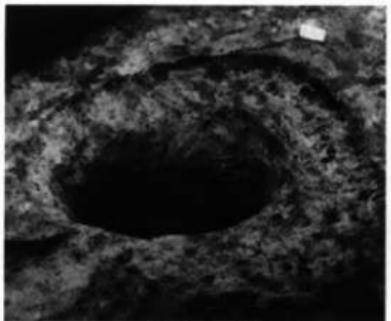
第4号住居址カマド



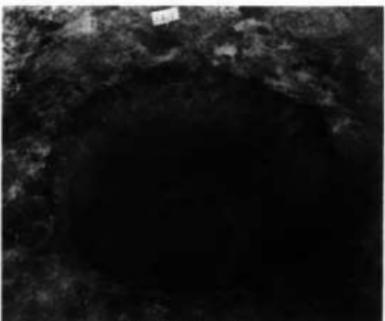
第 1 号土坡



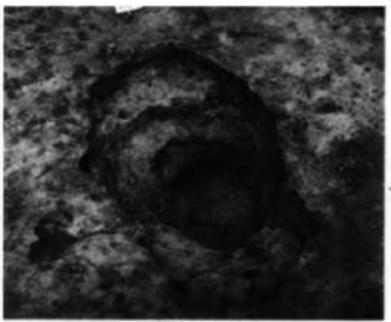
第 2 号土坡



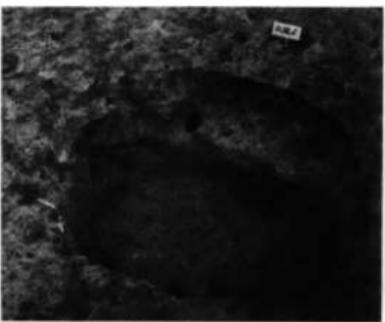
第 3 号土坡



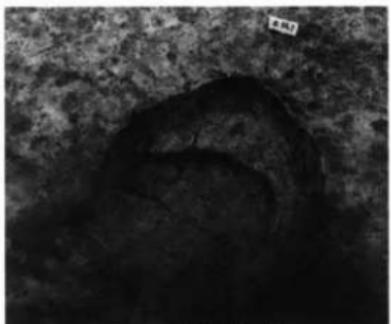
第 4 号土坡



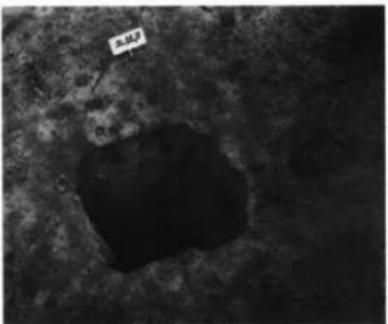
第 5 号土坡



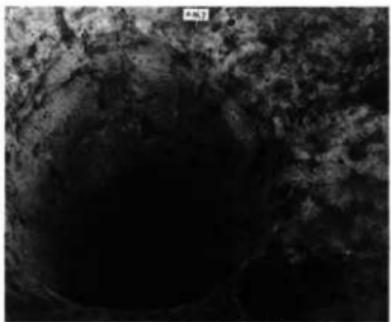
第 6 号土坡



第7号土块



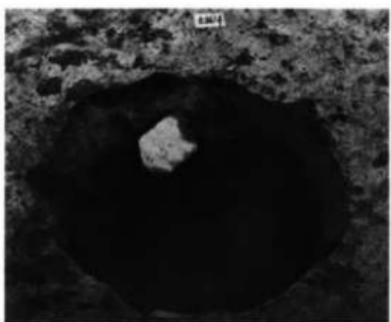
第8号土块



第9号土块



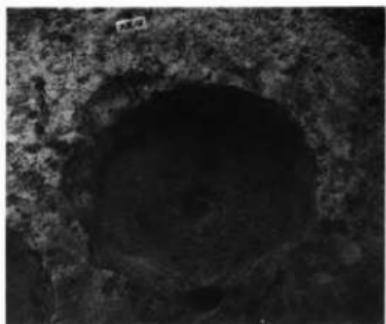
第13号土块



第14号土块



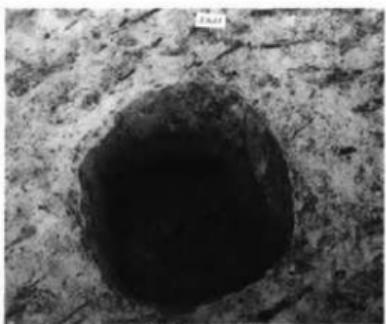
第15号土块



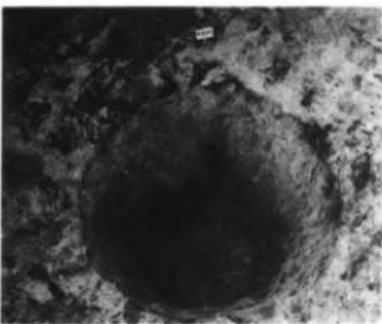
第16号土坡



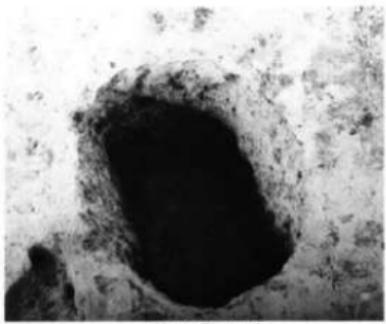
第20号土坡



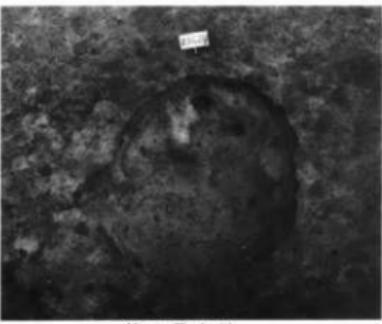
第21号土坡



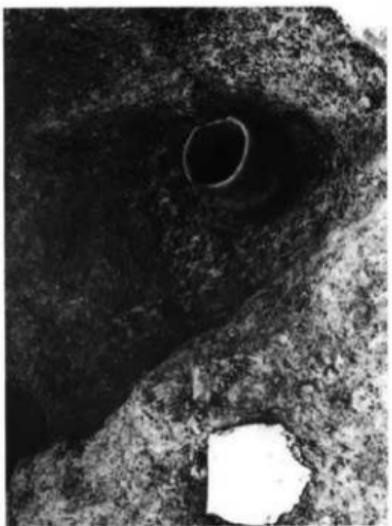
第22号土坡



第23号土坡



第24号土坡



土器出土状况(第1号住居址)



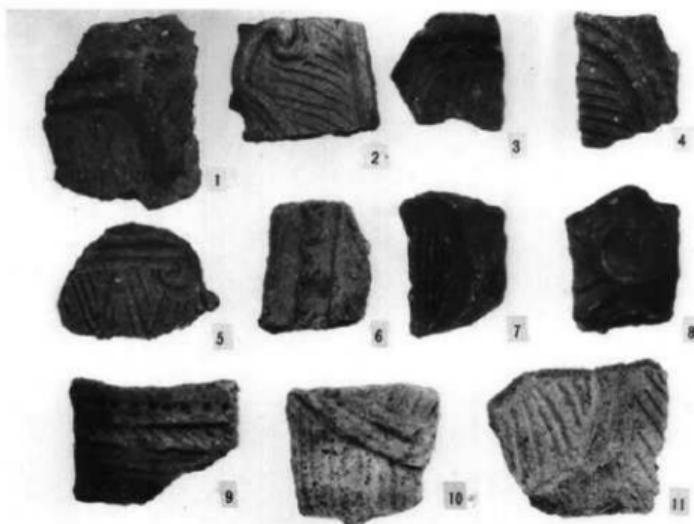
土器出土状况(第1号住居址埋甕)



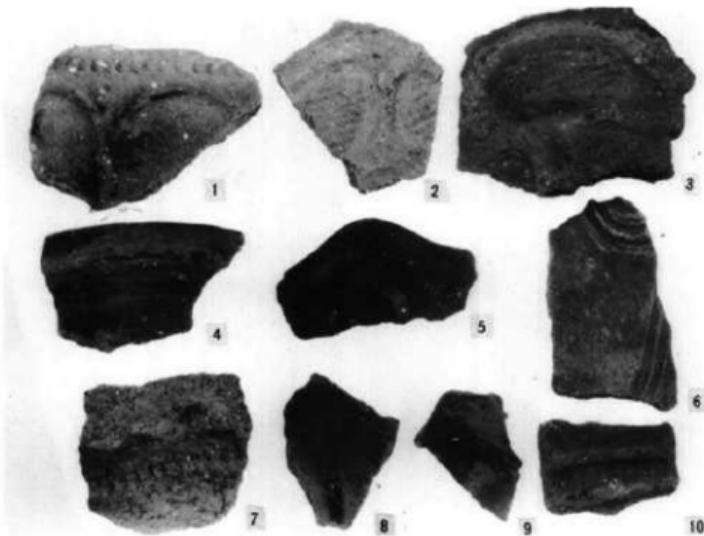
土器出土状况(第2号土坑)



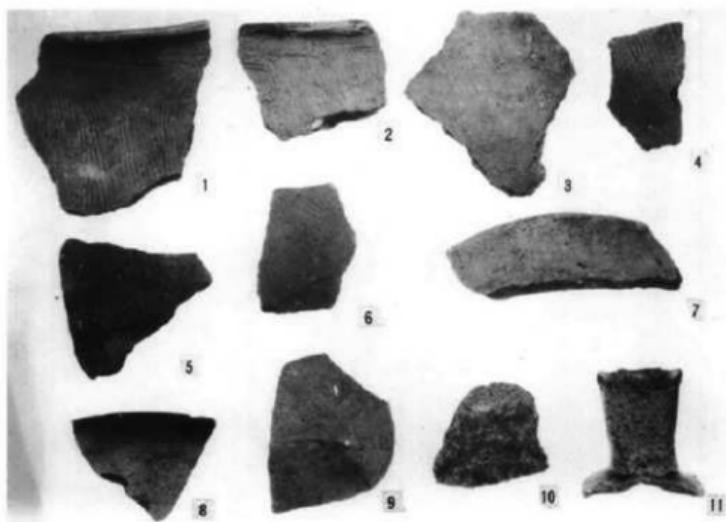
土器出土状况(第4号住居址)



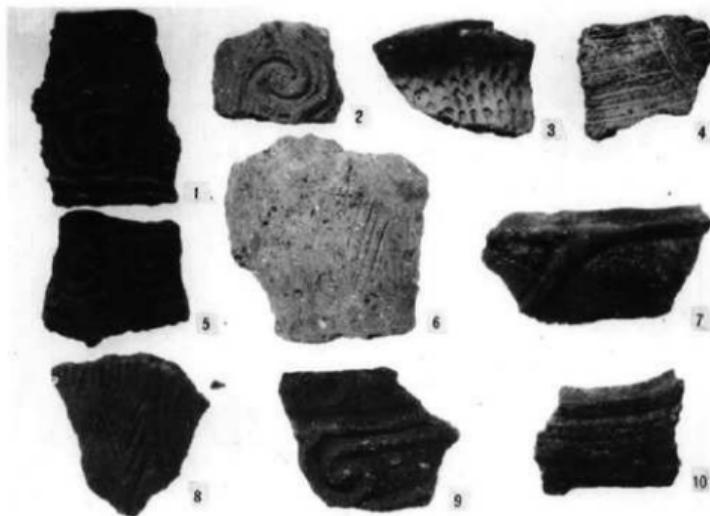
図版10 出土土器



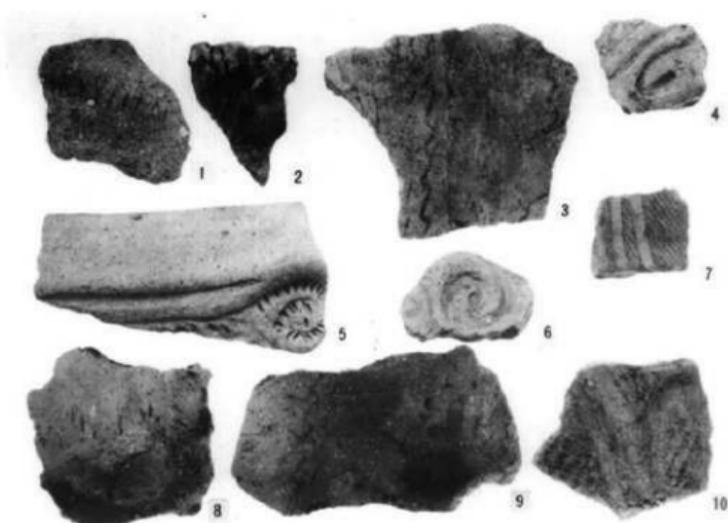
図版11 出土土器



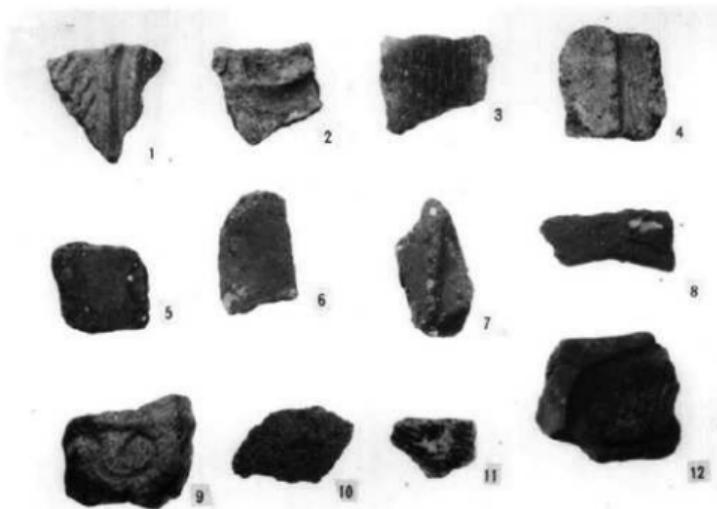
図版12 出土土器



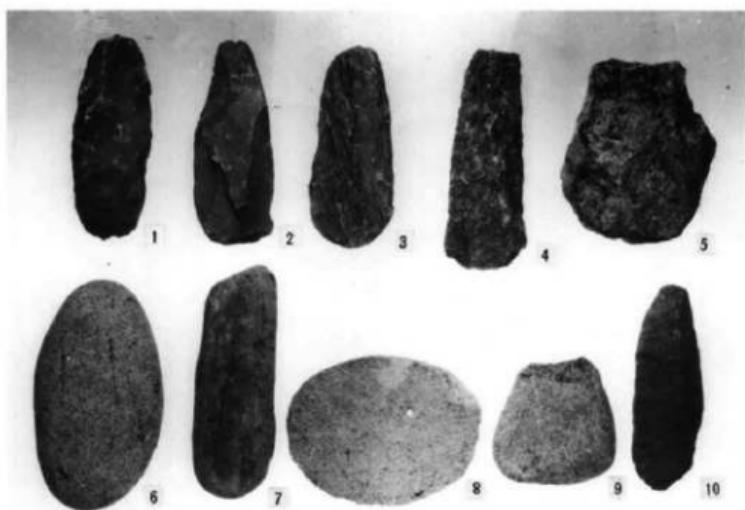
図版13 出土土器



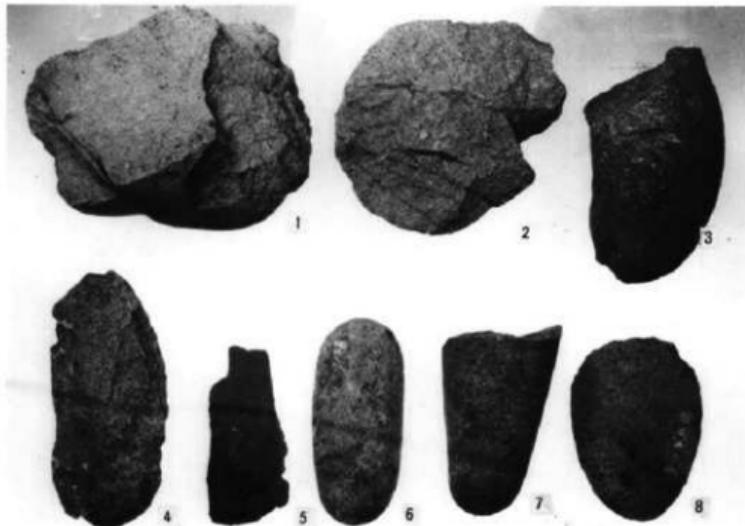
图版14 出土土器



图版15 出土土器



図版16 出土石器



図版17 出土石器

東田遺跡

—緊急発掘調査報告—

昭和54年3月15日 印刷

昭和54年3月17日 発行

発行所 長野県伊那市教育委員会

印刷所 長野県諏訪郡下諏訪町広瀬町

株式会社印 刷

